# 炎龍の旅～ポケモンディセンダーズ～

フォック・リザハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
炎龍の旅～ポケモンディセンダーズ～

【Ｎコード】
Ｎ０７４９Ｏ

【作者名】
フォック・リザハート

【あらすじ】
プラズマ団が壊滅して数ヶ月後、イッシュ地方は平和となりプラズマ団のポケモン解放から解放された、プラズマ団を倒したリザードン、フォックはイッシュのチャンピオンアデクからの依頼でイッシュ地方に散らばったプラズマ団、七賢人を探すこととなった、だが再び新たな危機が訪れる

## プロローグ（前書き）

この物語は赤き龍の続編です

どうも、フォックです

この話はポケモンブラック・ホワイトのエンディングを見てないかたは閲覧をオススメしませんので注意してください、ではどうぞ！！

# プロローグ

イッシュ地方

ここは二匹の龍がいる地方で新しいところだ

プラズマ団がこのイッシュ地方でポケモンの解放を目的にイッシュ地方は危機があった

しかしそれはある一人…いや一匹のポケモンとその仲間のポケモンと白き龍のおかげで

イッシュ地方は救われた

そんなイッシュ地方は今は平和になった

……

イッシュ地方の15番道路

そこにある一人の青年とポケモンがいた

蛇のような姿でとぐろには草などがからまった感じについていて、洋風のような姿のポケモン、ジャローダ、頭にはゴーグル、首には青いバンダナにツリ目、髪は赤でリュックを背負っていて、腰には剣がついていた

ジャローダ「やっぱここの修行はいいねフォック」

フォック「ああ、ちょうどいいなウィア」

互いに名を呼ぶ

そう、この青年の名はフォック、そしてジャローダの名はウィア

この一人と一匹はプラズマ団の野望と止めた者達だ、だがフォックは青年だが実は

フォック「じゃあ俺もやるか…ハッ！！」

フォックは力を込めた

するとフォックの姿に変化が

顔は龍のような姿になり、背中には翼が生えてきた

さらに尻尾が出てきた、だがその尻尾の先には炎が灯っていた

さらに手は人間の手から爪が生えた手になり

お腹はクリーム色で出っぱってきた

首にはさきほど巻いていた青いスカーフ

頭にはゴーグル、腰には剣がついていた

そう、フォックの正体はリザードン、彼は世界を見て周りその世界の事を納めるポケモンだ

もちろん彼には一匹の龍がいる、それは

？？？？「フォック、そろそろ奴等を探しに行こう」

そう言ってきたのは一匹のポケモン

全体が白く、尻尾はジェット機についてるエンジンのような尻尾、白い翼には爪がついている

このポケモンこそフォックと共に戦った伝説のポケモン、レシラム、名をハクランと呼ぶ

フォック「そうだなハクラン、奴等は一体何処に行ったのか…それに」

フォックは懐(ふところ)から輝かしい玉を３つ取り出した

一つは形がデコボコしたような感じの玉

一つは丸くデコボコのないすきとおるような玉

最後はひし形で金色の玉

フォック「ダークトリニティからもらったこの玉が何を意味するのか…それにこれはディアルガ・パルキア・ギラティナの３体のポケモンの道具だ…なぜゲーチスが持っているのかわからないが奴の手かかりはこの３つの玉しかないし」

そう、この３つの玉はプラズマ団の七賢人(しちけんじん)の一人、ゲーチスからそ

のゲーチスに従うダークトリニティからフォックに渡されたのだ

フォック「まあアデクさんからの依頼だし、七賢人を探さないといけねぇからな、修行し終えたから行きたいけどまずハクラン、一度俺の家に戻るからいい？」

家に戻ると言った

ハクラン「わかった…私はかまわないが」

ハクランは了解した

フォック「それじゃ行こう、ウィアは戻ってね」

フォックはウィアをモンスターボールという球体の機械に戻した

フォック「そんじゃハクラン行こう」

ハクラン「わかった」

フォックとハクランは飛んだ、そこからワープゲートが出てきて二匹はそこをくぐっていった

## プロローグ（後書き）

ウィア「ついに続編だね」

うん

ウィア「そういえばフォックって時の力をディアルガに授かったって設定だけどこれは？」

実はこの話で分かるよ

ハクラン「私にはわからないがどうなのか気になるな」

ちゃんとやれるようにはするよ

ウィア「パワーアップした僕の活躍、見ててね♪」

ハクラン「私も活躍するぞ」

出番的にどうなのかわからないよハクラン（汗）

ハクラン「何っ！？」

## 第1話　新たな仲間と共に（前書き）

ウィア「今回は旅したくだね」

うん、後誰がついていくかだよ

ハクラン「ウィアと私は行くからな」

うん、後はね…っとここからは本編で、ではどうぞ

# 第1話　新たな仲間と共に

フォックの家

フォック「ただいま～」

？？？？「あら、フォック、帰って来たのかい」

出てきたのは赤いたてがみに二足歩行の狐獣人

このポケモンはゾロアークというポケモンだ

フォック「うん、姉さん」

フォックはこのゾロアークの事を姉さんと呼んでいる

なぜこのような名前にしたのか？

理由は中の人など色々と見て姉さんと名付けたのだった

他にもポケモンを捕まえているためみんなあの戦いの後からしゃべるようになってきた

フォックから言葉の事などを教えたためウィアなどのメンバーはしゃべるようになったのだ

ヒョコ

姉さんのたてがみの中から一匹のポケモンが出てきた

まだ小さく、狐でゾロアークである姉さんと同じ黒い体色の狐のようなポケモン、ゾロアークの進化前のポケモン、ゾロアだ

フォック「おっ！ただいまロアル」

ロアル（ゾロア♂）「おかえりフォック～」

と、笑顔で言うロアル

……

姉さん「そうかい、七賢人の方探しを本格的に開始だね」

フォック「うん、だから誰か連れて行こうと思ってね、戻ってきたんだ」

修行していたので本格的に探そうと思っている、だがメンバーを誰にするか

姉さん「そんじゃあアタイが行こう、アタイもあんたに恩があるからね」

姉さんが行くようだ

フォック「わかった、でもロアルはどうすんの？せっかく再会したんだから一緒の方がいいよ」

ロアル「そうだよ～僕、マァと一緒がいい！」

と、ロアルは一緒に行きたいとわがまま言う

姉さん「でも…」

???「行けばいいではないか」

と、声を掛けたのは四足歩行に背中には白いたてがみのポケモン、エンテイ、だがこのエンテイは色違いだ

姉さん「あんたかい…」

姉さんは睨む

フォック「姉さん落ち着いてよ、執念深いのはわかるけどこうやってロアルと再会できたのはフレイブのおかげなんだよ」

そう、実は色違いのエンテイ、フレイブはフォックから贈り物でもらったポケモンで姉さんは迷いの森でフレイブと一緒に来た時に捕獲したポケモンなのだ

ロアルはセレビィを連れてあるところで捕まえて、そして再会した

姉さん「そうだったね…アタイがフォックに会わなかったら、あの子と再会できなかったね」

姉さんは暗くなった

フォック「でも二度と離れないようにするにはロアルと一緒の方がいいし、俺もいいと思うよ」

姉さん「フォック……わかった、そんじゃあロアルと一緒ね」

ロアル「やった〜！」

ロアルは姉さんのたてがみに入った

フォック「よかったね♪」

フォックは笑顔になる

……

フォック「それじゃあ行こう」

フォックと一緒に行くメンバーはジャローダであるウィア、レシラムのハクラン、オノノクスのアック、ドリュウズのドリュ、ゴウカザルのネッカ、ゾロアークの姉さん、そしてゾロアのロアルである

フォック「いざ！再び！」

フォックはワープゲートをくぐってイッシュ地方に戻った

## 第1話　新たな仲間と共に（後書き）

親子っていいね

ハクラン「ロアルの設定大変だな」

映画っぽくしたかったけど他の作者さんの方でやるとかぶってしまうからロアルを僕っこに設定、そして姉さんは中の人でしゃべるならアタイとかの姉御設定

姉さん「姉御って（汗）」

これは設定に入れたかったので

ネッカ「でもマァは映画と変わらないね」

やっぱゾロアなら自分の母親にはこう言わないとしっくりこないからね

## 第2話　探索開始とさらに付き添う者（前書き）

遅れましてすみません、この回からはコラボキャラと共に行きます

ウィア「誰だろう？」

ではどうぞ♪

## 第2話　探索開始とさらに付き添う者

カノコタウン

フォック「さて、ここであの野朗が来るのを待たないとね♪」

俺はニコニコしながらある奴を待っていた

そこに

メッパ「連れてきたで～」

ケンホロウのメッパが何か掴んでやってきた

フォック「ごくろうさまメッパ♪」

ドサッ

それと同時に何かが降ろされた

よく見ると人間だった

髪は薄い白で肩にかかるぐらいの長さ、服は白い白衣に黒いジーンズだ

フォック「さ～て…来たなゼロ♪」

ゼロと呼ばれる男は震えていた

フォック「まあ俺より2つ違いだがよろしくな」

ゼロ「ってかなぜ俺がこんなところに飛ばされるんだよ！！（泣）」

ヘタレとなっているこの男、実は悪い奴なのだ、だがフォックの活躍によりゼロと呼ばれた青年はフォックのｓ…付き添いになったのだ

フォック「まあ、貴様には色々と働いてもらうから…覚悟しとけゴラァ（黒怒）」

フォックの周りに殺気が

ゼロ「いやあああああああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？（泣）」

カノコタウンに聞こえたのはゼロの叫びだけだった

……

フォック「さて、お前にはポケモンを与えるけど、ちゃんと条件わかってるよね？」

その条件とは

ゼロは元はある者の側近で悪い奴なので研究にしてモンスターや人間を素材にしようとしている、なのでこの世界やその他の世界では捕獲したモンスターなどは研究の素材にしないこと、約束を破れば

フォック「約束を破ったら、あの野朗と共に地獄への片道キップを与えるから覚悟しとけ（黒）」

ゼロ「最悪だあああああああああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？（泣）」

もはや逃げられない

フォック「それじゃあこいつをもらえ」

フォックは一つのモンスターボールをゼロに与えた

フォック「投げてみろ」

ゼロはそういわれボールを投げた

そこに出てきたのは

黒い毛皮で隠れていて恐竜の子供のようなポケモンだ

フォック「こいつはモノズという悪・ドラゴンのポケモンだ」

そぼうポケモンのモノズ

これがゼロのパートナーポケモンだ

ゼロ「こいつをいいのか？」

フォック「まあお前がちゃんとなつかないかぎりはな」

すると

ガブッ

ゼロ「いてええええええええええええええええええええええええええええええええええええっ！！！！！！！！！！！！！？」

早速かまれた

フォック「はい、仲良くなったから行くぞ♪」

ゼロ「ちょっと待て！？俺かまれてるんですがフォックさ～ん！！（泣）」

フォックはニヤリと口をにんまりとして行く

ゼロ「なんでこうなるの（泣）」

こうしてこのゼロという青年の更正＆七賢人を探す旅が始まった

## 第2話　探索開始とさらに付き添う者（後書き）

はいＵＭＡさん所の小説から、ゼロが駆けつけました♪

ゼロ「しくしく（泣）」

挨拶せんかーーーーーーーーーーーーーーーーーーーい！！！！！！！（怒）炎のパンチ！！

ゼロ「グハッ！？」

はい、この青年は元は悪い奴で更正というので行動しますのでよろしくお願いします♪

ゼロ「鬼ー！！悪魔ぁー！！（泣）」

だまれやヘタレ（黒怒）

ゼロ「はい（泣）」

## 第3話　研究施設と七賢人（前書き）

さて、3話です

ゼロ「なあ？結局俺はこいつにかまれてるんですけど（泣）」↑自分のパートナーにかまれている

ゼロ、お前は不死＋不幸体質としておこう

ゼロ「不幸だあああああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！？（泣）俺はこのまま（泣）」

更正もあるから泣くな、ではどうぞ

## 第3話　研究施設と七賢人

ここは１８番道路

フォック「それにしてもここはバトル出来ていいな」

フォックは現在バトルして勝ったところだが

ゼロ「しくしく（泣）」

ゼロは負けてしまってモノズのサクスにかまれまくりでヘタレ化した

フォック「ほら、さっさと行くぞ、ったく、元気のかけらが無駄になったよ、後で払えよ」

何度も元気のかけらを使われキレている俺

そんな時

フォック「いたな」

七賢人の一人がいた

ロットという七賢人だ

ロット「ここは塩の匂いがする、私が生まれた国と同じ、塩の匂いがする場所……」

生まれた国か…

フォック「悪いがお前に聞くが、ゲーチスは何処に行った？」

するとロットは答えた

ロット「ゲーチス様は世界各地を旅し、あらゆる知識を集め仲間を探しておられた、出会ったときから私の望みを理解なされていた、相手の心がわかる、望みがわかる、それは誰かと生きていくために必要な力……N様はポケモンの心が分かる力に優れたお方、反面人の気持ちや心を理解する力はまだまだ育っておられなかったのだろう」

たしかに

ロット「だがそれもゲーチス様の完全なる計画の一部、ゲーチス様の何が真実で何が嘘かわからないがね……これはゲーチス様に頂いたものだがもういらないお前がうまく使うと良い」

もらったのは技マシンだった

……

フォック「じゃあ知らないってことだな」

ロット「はい、N様がいつかポケモンだけでなく、人の気持ちも理解できるようになられたら、我々ももう一度集いたい、そしてゲーチス様と向き合ってほしいと強く望む」

そこに、茶色のコートを着た男が

この人は国際警察、コードネームハンサムだ

フォック「ハンサムさん」

ハンサム「フォック、ご苦労だった、さてと……プラズマ団について国際警察の私に色々教えてもらおう！」

だがロットは態度を崩さず

ロット「……それがお前の望みとあらば」

素直に捕まった

ハンサム「ありがとう、これでゲーチスの除き、残る七賢人は後5人か」

フォック「俺もゲーチスの手がかりを探して見つけます、残りの5人も任せてください、こいつと一緒に」

俺はゼロを指差す

ハンサム「この者は」

ハンサムは質問した

フォック「こいつは別世界から来たのですが、元は悪いことしていて俺が今更正するために同行しています」

ハンサム「なるほど、君が世界の監視者で異次元からの旅人と聞いているから大丈夫だ、それに別の君とは別人のようだね」

まああっちは任せてあるしね（汗）

フォック「まああっちの俺がなんとかするでしょう」

ハンサム「そうだな、それに…彼等が何を考え、望んでいたか知りたいものだ……ではまた会おう」

ハンサムはロットを連れて去った

ゼロ「国際警察！？お前国際警察とも」

ゼロが驚く

フォック「そりゃね…それに後ある研究所が気になるから行くぞ」

俺はリザードンに変身して飛んだ

……

P2ラボ

ゼロ「おっ！かなりいいみたいだな」

だがここには誰もいない

フォック「ん？あれは」

俺はあるアイテムを拾った

フォック「怪しいパッチか…まあいいや」

俺はリュックに怪しいパッチをしまう

ゼロ「これはいいな！よし！ここでｋ」

ドガッ！！

一人の青年が宙を舞った

## 第3話　研究施設と七賢人（後書き）

七賢人はゲーチスを除いて残り5人、でも今回はオリジナルなストーリーになるので♪

ゼロ「ピクピク」←大ダメージ

さすが不死身の能力、痛みは倍加するけど死なないからいいね♪（黒）

## 第４話　新たな監視者（前書き）

今回は新キャラです

ゼロ「新キャラ（汗）」

ハクラン「誰なんだ？」

それは見てからのお楽しみ♪ではどうぞ

## 第４話　新たな監視者

フォック「ふう～」

俺は一息入れていた

今現在二人目を探すため今１５番道路にいた

こっから行けばブラックシティなんだよね

ゼロ「ぜえ…ぜえ…」

ゼロは疲れていた

なぜなら

フォック「このぐらいでやられてちゃまだまだだな」

そう、サクスの特訓などをしていた

サクス「ガウ」

フォック「お～サクスは元気だね♪」

俺はサクスの頭をなでなでした

サクス「キャウ♪」

俺にはなついていた、まあ主はゼロだけど

ゼロ「俺どうしたらなついてくれるんだ（泣）」

フォック「愛情が足りないんだよ愛情が、モンスターの命を粗末にするから愛情なんてわかないんだ」

愛情はモンスターにとってはいい、なつくのはかなり相手と接しないと無理、まあやすらぎの鈴とかをつけてなつくのもある

なつき進化するポケモンもいるけどね

そんなとき

？？？？「あっ！先輩！！」

そこに一人の少年が駆けつけた

青い短パンに青いTシャツ、髪も青く、頭には赤いゴーグルに背中には斧が背負ってあった

フォック「レックか」

俺は少年、レックに声をかけた

レック「先輩久しぶりですね♪元気でしたか」

元気だな～あいかわらず

フォック「まあね、こっちはどう？」

俺はレックに聞く

レック「僕の方は色々と片付けました」

やるな～さすが二人目の監視者兼異世界の旅人

フォック「そうか、そういえばバトルするか？久しぶりに？」

俺はレックに言う

レック「マジですか！？僕もちょうど先輩に特訓させようと思ったんですよ♪」

レックは嬉しそうだった

フォック「そうか…その前にまずは自己紹介しないといけないやつがいてな、その後でいいか？」

レック「いいですよ♪」

俺はゼロを引っ張りあげ紹介させた

フォック「こいつはゼロといって、今は俺が更正するために同行している」

ゼロ「よろしくな」

だがレックは

レック「へえ～こいつがですか～…悪い奴でヘタレの」

ゼロ「なんだと！！（怒）」

ゼロは怒る

レック「だってホントのことじゃん、おっさん」

ブチッ

ゼロの何かがキレた

ゼロ「んだと！！このガキ！！」

ブチッ

すると今度はレックの何かがキレた

ガシッ

レックはゼロの首のすそを掴んだ

レック「舐めてんじゃねぇぞ悪おっさんの癖によ（怒）海に沈めてやろうかおい！（怒）」

少年とは思えない雰囲気だった（汗）

ゼロ「ごめんなさい（泣）」

その迫力によりゼロは負けた

レック「わかればいいんだよ雑魚が（怒）」

そういい再び元のレックに戻った

レック「先輩、この人酷いですよ～」

俺にだだをこねる

フォック「はいはい、後で説教させるから、それよりバトルしようか？」

俺はバトルを申し込んだ

レック「はい♪」

笑顔で答えるレック

ちなみにレックは二重人格者でもう一人のレックはレックがキレたときに出てくるのだ

まあ態度も豹変するから注意だけどね（汗）

レック「行きますよ…はっ！！」

レックの周りに青いオーラが包まれる

するとレックの体に変化が

まずは顔がワニのようになり、頭からはトサカのような赤い突起物が出てきた

お腹は水色で手足はするどい爪が出てきた

もちろん赤いゴーグルもついていて、背中には斧を背負っていた

おおあごポケモンのオーダイルだ

フォック「それじゃあ俺も」

俺はリザードンに姿を変えた

レック（オーダイル）「さて、先輩、今回は勝たせてもらいますよ」

## 第４話　新たな監視者（後書き）

はい、新キャラのレックです

レック「初めまして、レックです、よろしくお願いします♪」

彼は二重人格設定でポケモンホワイトの方の主人公の名前です

ゼロ「ガタガタブルブル」

レック「所であのおっさん、さっきから震えてますけど？」

気にするな

## 第5話　フォックVSレック～時と空間の力～（前書き）

はいバトルです

レック「負けませんよ！」

こっちだって！

## 第5話　フォックVSレック～時と空間の力～

お互い配置につくフォックとレック

レック「行きますよ先輩！ハイドロポンプ！！」

レックはいきなり大技を繰り出した

フォック「甘いよレック、最初から大技を出すのは無理がある、守る！」

フォックは守るで防いだ

レック「やりますね、ならウィータルソニック！！」

レックは斧を一振りした、すると斧から水色の衝撃波が飛び出して来た

フォック「はっ！」

フォックは剣で相殺した

ゼロ「すげぇ～（汗）」

ゼロはただ唖然としていた

フォック「はっ！」

レック「やっ！」

カキーン！

互いの武器がぶつかり合う

フォック「光の剣雨！！」

レック「ディフェンスアックス！！」

レックは斧を両手で振り回してガードした

レック「冷凍パンチ！！」

フォック「炎のパンチ！！」

互いの拳がぶつかり合う

お互い一歩も譲らない

フォック「さすがレックだ、ここまでやるなんて」

レック「それはこっちのセリフですよ先輩」

もはやハイレベルな戦いだ

レック「なら…これで決めます！！亜空切断！！」

レックは爪を一振りした

そこから青い鋭い衝撃波ができ、それをフォックに向けて飛ばした

フォック「なら俺も！！時の咆哮！！」

フォックは時の咆哮で対抗する

お互いの技が爆発した

光が包み込んだ

……

フォック「今回は引き分けだな」

レック「そうですね」

お互いボロボロになっていた

ゼロ「なっ！？なんなんだ！？このハイレベルな戦いは！？」

ゼロは驚いた

## 第5話　フォックVSレック～時と空間の力～（後書き）

レック「結局引き分けか～」

まあまあ、でも今回レックがパルキアの空間の力を使ってましたね、実はレックはパルキアから空間の力を受け継いでいます

レック「空間の力使うのかなり工夫するけど」

まだ実は別の伝説のポケモンの能力を使うものが来るかもしれません

## 第6話　古代の城の探検（前書き）

はい久しぶりの更新です

レック「早く進めましょう先輩♪」

ゼロ「もういや（泣）」

## 第6話　古代の城の探検

フォック「さてここだなレック」

レック「はい、ここに七賢人の一人が入ったと聞きました」

俺達三人はここ、古代の城へとやってきた

アデクさんと他のみんなとともにこの城に入ったんだよね

その時は砂に落ちたりだったから、今回もなんだよね～（汗）

フォック「ほらいくぞ」

ゼロ「はい～（泣）」

俺はゼロを引きずりながら城に入った

……

俺達は一番下、つまり前にゲーチスがいた場所にいた

フォック「砂の上に入口があるな」

俺達は中に入った

入った先に

プラズマ団「！！」

プラズマ団のしたっぱだ

レック「今のは」

フォック「プラズマ団のしたっぱだな、急ぐよ！」

俺達はプラズマ団の後を追った

……

プラズマ団「ちくしょー！」

追いついた俺達はしたっぱを追い詰めようとしたが

なぜか実力行使でバトルを挑まれた

まあいいけど

繰り出したのはワルビアルだ

かなり育てているようだな

だけど

フォック「ウィア！ギガドレイン！」

ウィア「ギガドレイン！」

ギガドレインでワルビアルは倒れた

プラズマ団「くっ！」

フォック「おっと逃がさない、無効の時」

俺は時の力の一つ、無効の時を発動させた

この技は一時的に相手の動きを止める技だ

フォック「さて、貴様には聞きたいことがある？それにあんたがここにいるってことはここに七賢人がいるってことになる違うか？」

俺はそう言う、そのプラズマ団のしたっぱは観念したか

プラズマ団「くっ…ああ、この古代の城で七賢人のリョクシ様がポケモンを探している」

ポケモンを？

プラズマ団「それを邪魔させないよう見張っていたのに……弱い俺のバカバカバカバカ！もう一つおまけにバカ！かわいく言ってアンポンタン！」

ブチッ！

俺の何かがキレた

フォック「あぁ！テメェがちゃんとポケモンを育てねぇからだろ！！俺に言うなボケ！！」

バキッ！！

俺はむかついたのでプラズマ団したっぱに一発殴った

プラズマ団「ぐはっ！？」

そいつはむなしくも倒れた

死んでないので大丈夫

ゼロ「えええええええええええええええええええええええええええ
ええええっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？」

フォック「うるさい！」

バキッ！？

ゼロ「ぐはっ！？」

うるさいヘタレに一発殴った

レック「人にバカバカ言うからですよ、人がいない所で言えばよかったのに」

たしかにそうだな、まあ自分の事言ってる感じもあったがアンポンタンとか俺に向かっていうか普通（怒）

……

フォック「う～ん…迷うな（汗）」

俺たちはこの迷路のような城を回っていた

レック「先輩、こっから誰かいますよ」

俺たちはそこへ行った

フォック「いた」

ある部屋の入口の前にリョクシはいた

フォック「おい」

俺は声をかけた

リョクシ「……今ひとたびこの古代の城にいるポケモンのウルガモスを捕まえ、ゲーチス様に献上する、そのつもりであったがダークトリニティ共が言うにはゲーチス様は何処かに行かれたというではないか……」

こっちもはずれか

リョクシは少し離れる

リョクシ「七賢人……7人そろってこそ完全である……あの言葉の真意、今はわからぬ、利用されたとしてもいいが、もう夢は見れぬな」

と、俺に近づいて

リョクシ「もうこれはいらぬ、ゲーチス様に頂いたが私には使うあてもない」

と、技マシンの「瞑想」をもらった

リョクシ「この古代の城も我々の城も崩れ行く……ただ違うのは古代の城は国の跡……我等の城は何も残せなかった」

レック「何がなんだか」

レックはこの件の事はあまり詳しく話していないので知らない

すると

誰かが素早く入ってきた

ハンサム「さてと……プラズマ団について国際警察の私に色々教えてもらおう！」

はやっ！？

ゼロ「あのおっさんすげぇ（汗）」

さすが国際警察といったところか（汗）

リョクシ「……了解した、だが我々はゲーチス様もN様の事もよく知らぬぞ、本当の親子かどうかも定かではないのだ……」

たしか

……

ゲーチス「それでも私と同じハルモニアの名前を持つ人間なのか？不甲斐無い息子め」

……

あの時あいつはそう言った

息子と言ったのならゲーチスはNの父ということになる

それにハルモニア……

この名前の意味もわからない…でも今Nは何処かでゼクロムと一緒に旅に出てるだろう、自分を探す旅に

きっと……

ハンサム「ありがとう！これでゲーチスを除き残るはあと4人か……彼等が何を考え望んでいたか知りたいものだ……ではまた会おう！」

ハンサムはリョクシを連れて去った

そういえば

フォック「この先にウルガモスがいるならいくしかないな」

レック「そうですね、どうせですからゲットしましょうか？」

まあたしかにね、でも俺実はメラルバを持っていて、そこから苦労してウルガモスに進化したから俺はいらないから

フォック「俺はもう持ってるから二人の誰かにゲットさせる」

ということでレックかゼロのどちらかにウルガモスを譲ることにした

ゼロ「俺1匹だからちょうどいい！これなら」

たぶんこいつは無理だと思う（汗）

## 第6話　古代の城の探検（後書き）

次回はウルガモスを誰がゲットするかお楽しみ

レック「たぶんゼロには無理だと思うけどね～」

ゼロ「しくしく（泣）」

## 第7話　ウルガモスとヒヒダルマ（前書き）

レック「ついにウルガモスとのご対面ですね」

ゼロ「絶対捕まえてやる！」

お前は無理

ゼロ「（泣）」

ではどうぞ♪

## 第7話　ウルガモスとヒヒダルマ

俺達は七賢人リュクシがいっていたウルガモスの部屋に来ている

ウルガモス『お主らはなんじゃ？わらわが寝ているのに』

フォック「すみません、起こしてしまって」

俺は謝る

ウルガモス『ほう～お主ら人間のように見えるがポケモンのように見える、お主らは何者なのじゃ？』

レック「僕達は異次元の旅人、世界をまわっていて旅しているんです」

そんなウルガモスは話を聞いて

ウルガモス『ほう～世界かの～わらわも行きたいの～』

と、行きたそうにしてる

フォック「う～ん…俺はメラルバ持ってるから誰かもらったほうがいいかもね」

俺はその進化前のメラルバを持っているため、捕まえるのは却下

ゼロ「じゃあ俺g」

するとウルガモスはゼロに熱風を繰り出した

ゼロ「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？」

やっぱりこいつにウルガモスあわねぇな（汗）

ウルガモス「お主みたいないかにも悪そうなものにわらわを使う資格はない」

キッパリ言っちゃったよ（汗）

ゼロ「しょんな～（泣）」

ゼロは力尽きた

死んでないが（汗）

ウルガモス「それじゃあお主にしよう」

そう指名したのはレック

レック「うん、よろしくね…名前どうしよう」

名前か～

フォック「ティターナがいいんじゃない」

ウルガモスを見るとまるで妖精のように思える

レック「そうですね、さすが先輩、それじゃあよろしくねティターナ」

ティターナ（ウルガモス）「よろしくの～わらわもその世界を色々見渡したいしの～」

ティターナは喜んでレックのモンスターボールに収まる

……

ゼロ「もう災難だ（泣）」

ゼロは泣く

フォック「ったく、これじゃ先が思いやられる」

ただいま俺達は古代の城を出たところだけど

フォック「そういえば、この石像…」

そういえば色々気になっていたダルマのような石像

フォック「アララギ博士からこの怒りまんじゅうもらったけど、これヒヒダルマみたいなんだ」

レック「ヒヒダルマですか？」

ゼロ「それで何が起こるんだ？」

たしか……

フォック「アララギ博士が言うにはヒヒダルマには特性ダルマモードというのがあって、この石像になってる状態は瞑想モードって言って、エスパー技まで使えるみたいなんだ」

レック「ヒヒダルマってエスパー使えるんですか？」

たしかに

フォック「だからこの怒りまんじゅうを…」

俺は怒りまんじゅうを石像の前に置いた

すると

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

瞑想モードになったヒヒダルマは活動モードに変わった

ゼロ「よし！ならゲットだ！！」

ゼロは名誉挽回のためにヒヒダルマをゲットしに行く

フォック「やられるなよ～」

俺はゼロに忠告した

……

ゼロ「よし！サクス！」

サクス『へいへい』

呆れたようにサクスはヒヒダルマに向かう

サクス『龍の息吹！』

まずは龍の息吹を繰り出した

ヒヒダルマ『ぐわっ！？なんだお前は！』

と、ヒヒダルマも戦闘態勢に入る

ゼロ「よし！今度は龍の怒り！！」

サクス『オラァ！！』

龍の怒りがヒヒダルマに炸裂

ヒヒダルマ『ぐおっ！？』

固定ダメージで効いてる

ゼロ「今だ！モンスターボール！！」

ゼロはモンスターボールを投げた

カタカタカタ…

ボールがゆれる

カチッ

ヒヒダルマはボールに収まった

ゼロ「よし！俺の初ゲットだ！！」

嬉しそうにガッツポーズをする

フォック「これで手持ちは2匹だな」

ゼロ「よし！出て来い！ダルマ！！」

ヒヒダルマ、ダルマをボールから出すゼロ

ダルマ『なんだ、わしはそんな名前嫌なのだが』

ゼロをわしつかみ

ゼロ「いやあああああああああああああああああああああああああああああああなんでこうなるんだあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？（泣）」

ダルマじゃ無理があるだろ（汗）

その後ヒヒダルマの名前はヒヒマと名付けた

## 第7話　ウルガモスとヒヒダルマ（後書き）

ゼロ「俺って（泣）」

次回もゼロの不幸は続く（笑）

ゼロ「いやあああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？（泣）」

## 第8話　力の検査へそして新たな仲間（前書き）

レック「先輩遅いですよ」

ごめん（汗）

ゼロ「ってかなんなんだよこのタイトルは（汗）」

新たな仲間と俺とレックのね

レック「ああ！もうそんな時期でしたね」

ゼロ「はい？」

レック「そんな第8話をどうぞ」

## 第8話　力の検査へそして新たな仲間

フォック「はあ～やっとゲーチス以外七賢人を捕まえた～」

レック「やっとですね」

フォック達は七賢人をゲーチス以外全員を捕まえてただいまホッとしているご様子

ゼロ「にしてもずいぶんと長かったな～」

ゼロは疲れた表情をしながら言う

フォック「とりあえずは収まったけど、今度はゲーチス本人を見つけないと…この3つの玉…おそらくはシンオウにいるかもしれない」

シンオウ

イッシュからかなり離れたところにある地方だ

レック「そうですね、そこに行きましょう先輩」

だが

フォック「その前にレック、俺とお前の検査とかしないと」

ゼロ「検査？」

ゼロは疑問に思った

レック「俺達は時の力と空間の力を持っているのは知ってるよね？」

そう、この二人はディアルガとパルキアの力を持っている

フォック「だけど一度力や色々と検査が必要だからここから別の世界にある『ゴットホスピタル』という場所で俺とレックは検査するんだ」

ゼロ「その検査って？」

ゼロは質問する

それをフォックが答える

フォック「まあしいていうと健康診断みたいなものだ、力をもつ者は色々と負担とかもある、それに色々と技が封じられたりとかもあったりもするから一度検査するんだ」

レック「僕も別の方で空間の力を封じられてオマケに吐き気がするほどの精神的な攻撃を受けているから」

レックは空間の力の方などで色々おきているようだ

フォック「その前にあいつと待ち合わせてるんだよね」

ゼロ「あいつって？」

フォック「行けばわかる」

フォックはそう言うとリザードンに姿を変え、レックとゼロを乗せて何処かへと向かった

……

ライモンシティ

そこに一人の青年がいた

黒髪に日焼けした黒い肌でハンサムな青年だった

その青年の目の前で一匹のリザードンが降りてきた

青いスカーフに頭にはゴーグルをつけて、腰に剣をつけているリザードンと乗っている少年と青年

フォックはリザードンから人間の姿へと戻った

？？？？「あんさんか…」

その青年はふてくされている

よほど何かフォックとあったような感じだ

フォック「はあ～俺がこうして来たのにその態度はないだろ、関西弁君…いや、元ポケモンリーグチャンピオンでポケモンハンターでキメラの火野輝（ひの あきら）」

青年、アキラが少し引く

レック「先輩、彼は？」

フォックがレックとゼロに向く

フォック「こいつはアキラって言う奴で、あの女の部下だ、だけど俺とジュンという少年とその仲間達によってあの女はやられ、そしてこいつはその女の恋人だったもの…利用されてね…」

ゼロ「まさかこいつも！？」

フォック「ああ…ポケモンハンターの時点でだけど、それとは違う…こいつh」

アキラ「それ以上いうなや！」

突然アキラが一喝した

アキラ「俺はあいつが好きやった…すべてお前のせいや！」

アキラは怒ったように怒鳴る

その目には怒りというより憎しみをした目だった

フォック「何いってんだ、あの女はお前を捨てようとした…だからって事実から逃げてばかりいるな！」

フォックがアキラに一喝する

アキラ「俺は…俺は…ならフォック！勝負や！」

アキラがすかさずフォックと勝負を申し込んできた

フォック「いいだろう…とりあえず場所を移すぞ」

アキラは頷いてフォックはリザードンの姿となり、三人を乗せて何処かへと飛んだ

……

フォックと一緒に乗ってきた三人はある場所についた

そこは青空が広々とした場所だった

レック「ここは…空間の狭間」

フォック「そう、ここなら文句はないだろ」

フォック達は空間の狭間に降りた

レック「本来、空間の狭間はそれぞれ違うから…ここは草原の空間ですね」

レックが言った通り、そこは草原だった

フォック「さて…」

フォックがリザードンから人間の姿へと戻った

フォック「早速やろうか？…だがそんな実力では俺には勝てないけどな」

アキラ「フン！その天狗の鼻、へしおうてやるわ！」

アキラは力を込めた、するとアキラの体が見る見ると変化した

目の縁が赤く、目は澄んだ青色で顔以外からグレーの体毛が生え、耳は狼のような耳で歯は犬のような歯となった

しかもその姿はフォックの手持ちのポケモンであるゾロアークの姉さんと同じ、ゾロアークの姿だった

フォック「たとえキメラだろうが俺を舐めると後悔するぞ」

そう言ってフォックは愛剣、ドラゴニックセイバーを構えた

レック「キメラ…先輩が言っていた別の世界のことでの出来事…先輩もすごい世界に行ったな～（汗）」

ゼロ「ってかキメラって！？すげぇ！気になる！」

ゼロはすごく気になっていた

こんな技術があるとは思ってもみなかった

アキラ「俺はそう簡単にいかへん！俺には超再生能力があるんや！」

キメラでも再生能力がある

フォック「超再生能力がお前だけだと思うな、俺もすでに持っている能力だ、それに俺は回復が基本だから」

アキラ「なら回復せえへんように倒したる！」

アキラが構えた

彼等の戦いが始まる！

## 第8話　力の検査へそして新たな仲間（後書き）

はい！『ポケモンハンタージュンの冒険』から、敵である関西弁君ことアキラが来てくれました

アキラ「誰が関西弁君やねん！」

ゼロ「フォック、お前なんなんだよ（汗）」

レック「まさか先輩が行ったとこから」

ちょうどこの関西弁君をどうしようか考えてたんだよね～♪（黒）

許可も出たし

アキラ「ホンマお前何者や（汗）」

はいはい、次回はそんな関西弁君と俺が戦います（黒）

アキラ「すごく嫌な予感が（汗）」

## 第9話　幻影と時と奥義（前書き）

はい！関西弁君と俺との対決です

レック「先輩がんば！」

任せろ、俺はそう簡単にやられないから

ゼロ「お前はなんなんだよ（汗）」

ではどうぞ♪

# 第9話　幻影と時と奥義

フォック「はっ！」

フォックはリザードンに変身する

アキラ「ならいくで！悪の波動！」

アキラは螺旋状(らせんじょう)の黒い波動を繰り出した

フォック「なら散沙雨！！」

剣を連続で突いて悪の波動を打ち消した

アキラ「やっぱそんな攻撃は通じへんか…なら幻影を見せてやるわ！幻影水波！」

ものすごい大量の水がフォックに襲い掛かる

アキラ「あんさんの弱点は水…ポケモンになっても水には通用するはずや」

そう、本来フォックの姿はリザードンだ、リザードンの姿では効果は抜群だ

しかもこれはただの幻影ではない

アキラの幻影は人が持っている五感から幻影で惑わす

つまり現実と同じリアルな幻影を体験してしまうことだ

水がフォックを飲み込んだ

だが

突然水がまるで吸い寄せられるような感じで消えていくではないか

アキラ「なっ！？なんや！？」

フォック「お前の幻影はたしかに強い…だが相手が悪かったな」

フォックは水びだしになっているがあまりダメージを受けたように見えなかった

それどころか幻影の水がドラゴニックセイバーによって吸収していた

アキラ「剣が！？一体なんなんや！？」

するとフォックは説明する

フォック「ドラゴニックセイバーは全属性の力を込めている、吸収など可能…そして本来こいつはドラゴニックセイバーという名前でもない…本当の名前は…」

フォックはドラゴニックセイバーの本来の名を言う

フォック「聖剣ソウルセイン」

聖剣ソウルセイン、それがフォックの聖剣の本当の名だ

アキラ「聖剣ソウルセイン…」

フォック「俺の剣は回復能力とそして…龍の力を込めている…それによって名前がドラゴニックセイバーになったけどな…」

元は回復の能力を持っているフォックの聖剣…さらに

???『あ～結構な攻撃だが俺には通用しねぇけどな～』

アキラ「!?なっなんや!?何処から声が聞こえるねん!」

アキラが辺りを見渡すが見渡すかぎり草原だ

???『おいおい、俺はテメェの目の前にいるんだぜ』

その声がそう言う

まさかとアキラはフォックの剣を見る

すると剣は少し光り

???『おっ!やっと気づきやがったか…』

そう、フォックの剣はしゃべるみたいだった

フォック「まあ気づかないだろうな、ドラゴニックセイバー」

フォックは自分の愛剣にそう言う

Dセイバー『それもそうだったなフォック…さてそこのバカ関西弁野郎…俺とフォックにそんな小細工は通用しねぇぜ』

アキラ「なんやと！」

アキラは頭がカチン！と来た

アキラ「ならこれはどうや！幻影雷撃！」

今度は幻影の雷を打ち落とすつもりだ

Dセイバー『さて、どうするフォック？』

Dセイバーがフォックに聞く

フォック「そんなの決まってる」

フォックがDセイバーを構える

フォック「打ち砕くまでだ！時空剣！！」

Dセイバーが青い炎に包まれる、フォックは剣を雷に向かって一振りした、すると雷は打ち消された

そこから

アキラ「隙ありや！ナイトバースト！！」

ゾロアーク専用技、ナイトバーストがフォックに迫る

フォック「悪魔の翼！」

フォックの両翼が変化した

リザードンの両翼がまるでコウモリのような翼へと変化した

ナイトバーストが両翼に吸収されてしまった

アキラ「なっ！？」

フォック「あぶねぇな～ウィングチェンジャーなかったら今頃ダメージ受けてたし」

ウィングチェンジャー、フォックの第２の能力だ

それぞれの両翼をあるものの翼に変えて様々な効果を与える

その一つ、悪魔の翼は悪タイプや闇を吸収してしまう効果がある、だが膨大な量までは吸収可能だ

アキラ「くっ！」

フォック「どうした？それで終わりか？」

フォックは余裕の表情だ、両翼はリザードンの翼へと戻っている

だがアキラもこれで終わったわけでもない

アキラ「まだや！これで！」

何処からかカプセルを取り出した

フォック「その女のアレを使うつもり、それは許されないな…時よ…」

すると時間が止まり、アキラや見ているゼロとレックが止まってしまった

フォックはアキラに近付いて、そのカプセルを奪い、上空に飛ばして火炎放射で消した

フォック「時よ…動け」

フォックの声とともに時間は再び動き出した

すると

アキラ「なっ！？あのカプセルが！？」

フォック「テメェはまだあの女に利用されていることがまだわからないのか？」

フォックは不機嫌そうに言う

アキラ「うるさい！俺はあいつが好きなんや！お前に何がわかるっていうんだ！！」

アキラはフォックを怒鳴りながら睨みつける

アキラ「ならこれでも食らえや！！イリュージョン・ショック！」

フォック「うっ！」

フォックは突然痛みを感じた

アキラ「この技はお前が生まれた時からの痛みの記憶を再生させるんや、これで終わりや！ナイトバースト！！」

ナイトバーストが痛みを感じるフォックに襲い掛かる

フォック「痛みごときで…やられるなと思うな！！」

フォックは一喝し、ナイトバーストを剣の一振りで打ち消した

アキラ「なんやと！？」

自分の技が打ち消されたことに驚くアキラ、だが彼がもっと驚いているのは

イリュージョン・ショックが打ち破られたことだった

フォック「あいにく俺は精神的な攻撃なんてなれているんでな…辛い過去など色々とな…テメェにはわからねぇだろうが…そんな小細工ごときで俺が通用すると思うな！！閃光爆炎斬！！」

フォックはアキラの懐（ふところ）に入り、そこからアキラに一閃（いっせん）した、するとアキラの体が炎に包まれた

アキラ「ぐわっ！？」

だがフォックの攻撃はこれで終わりではなかった

アキラの周りの地面から魔方陣が現れた

アキラ「くっ！」

アキラは離れようとするが魔方陣はアキラについたままで離れようとしない

フォック「集いし光よ今ここに集まり制裁せよ！」

フォックが詠唱する、魔方陣が光を放つ

フォック「ファイナルセイント！！」

魔方陣から光と雷撃が容赦なくアキラに襲い掛かり

アキラ「ぐわあああああああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！？」

アキラに大ダメージを与える

しかし

アキラ「だが俺には超再生能力があるんや！」

キメラ特有の基本能力、超再生能力で傷が治っていく、血が出ていた傷は治っていった

レック「傷が治っていく」

ゼロ「厄介だな」

レックとゼロは見守る

フォック「やっぱ俺の秘奥義だけでそう簡単に倒せないな…だがどうだろうがテメェを倒す」

アキラ「俺は…負けへん！！」

アキラがフォックに迫る

## 第9話　幻影と時と奥義（後書き）

次回は戦いの後編です

## 第１０話　愛とは（前書き）

さて、関西弁君…じゃなくてアキラ戦後編です

ゼロ「なんか関西弁君強調してねぇか？（汗）」

大丈夫だ、問題ない

ゼロ「なぜに（汗）」

レック「ではどうぞ」

## 第１０話　愛とは

アキラ「悪の波動や！」

アキラが至近距離で悪の波動を放つ

フォック「くっ！」

フォックは咄嗟に受身をとってダメージを最小限にする

アキラ「ナイトバースト！」

今度はナイトバーストを放つ

フォック「舐めんじゃねぇ！！聖炎剣（せいえんけん）！！」

ドラゴニックセイバーが光の炎をまとい、フォックはナイトバーストを一閃した

ナイトバーストは聖炎剣によりかき消された

アキラ「くっ！厄介やな！」

アキラの幻影はフォックには通じない

フォック「テメェに教えてやるよ…」

フォックはアキラのそばに接近

フォック「そんな生半可な力では俺に勝てないと！滅気斬（めっきざん）！！」

フォックのドラゴニックセイバーが青い炎をまとい一閃する

アキラ「ぐわっ！？」

アキラは接近され食らってしまう、さらに

アキラ「（な…なんや…力が…それに回復が…できへん…）」

アキラの超再生能力がだんだんと遅くなる

フォック「滅気斬はスタミナを減らす剣技、それにこれによってお前の超再生能力が低下する…超再生能力でもスタミナや色々と低下すれば再生能力は低下する」

フォックの剣技により、アキラはこれで超再生能力が低下して、もう自己回復することができない

フォック「そしてこれで終わりだ…」

フォックは剣を構えた

アキラ「（まさかまたあの秘奥義ちゅうやつを出すつもりや！そんなことさせへん！）幻影水波！！」

アキラは詠唱を止めようと幻影の水をフォックに繰り出す

アキラ「（詠唱できひんようにすればこっちのもんや！）」

アキラは見抜いていた

フォックの秘奥義は詠唱によって発動されることを

詠唱中は隙を見せてしまうことをアキラは見抜いてアキラは技を発動した

フォックの周りから水が包み込む

アキラ「これで終わりや！！」

アキラは勝利を確信した

だが！

アキラ「なっ！？」

アキラは驚いていた

なぜなら

Dセイバー『させねぇよ！』

フォックの周りから青いオーラが包み込んだ

Dセイバー『水を無効化するアクアオーラだ、俺の事を忘れるんじゃねぇよ』

ドラゴニックセイバーがアクアオーラをフォックにまとったためフ

ォックは詠唱する

フォック「聖なる炎よ」

フォックが金色の炎をまとう

フォック「制裁の剣となり今ここに誓いの時を！」

ドラゴニックセイバーが金色の炎に包まれる

さらに幻影は解かれた

アキラ「（そんな！？俺が…この俺が！？）」

アキラは動揺する

フォック「今ここに切り開く光となる！！」

フォックがアキラに接近し

フォック「聖炎（せいえん）！！爆裁斬（ばくさいざん）！！」

フォックは連続でアキラを斬りつけた

そこから小規模の爆発がアキラを襲う

アキラ「あっ！がっ！ぐっ！がっ！」

連続で斬りつかれてアキラは反撃ができない

そしてフォックのドラゴニックセイバーの剣先が丸い大きな炎のかたまりができ

フォック「燃えやがれ！！」

フォックは大きく剣を一振りした」

それがアキラに辺り爆発を起こした

アキラ「グガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

アキラは吹っ飛んだ

すでに体中が火傷と傷だらけになっていた

さらに血までも出ている

フォック「終わったな」

フォックは剣を鞘におさめて、アキラの元に駆けつける

フォック「リジェネ、ケアルガ」

フォックはアキラに回復魔法をかける

フォック「ヒール、ハートレスサークル、ソウルリカバー」

さらに回復魔法をかける、ハートレスサークルと言うと自分の周り

から魔方陣が地面に現れてアキラを癒す、そしてさらにソウルリカバーと唱えると青い炎がアキラをまとい、傷などをふさいでいく

フォック「これでよしっと」

アキラを見るとフォックによって傷ついた傷や火傷は完治していた

レック「先輩！」

レックとゼロがフォックの元へ駆け寄る

フォック「ふう～…おいアキラ、一つ教えてやる…愛というのはそう簡単にいくもんじゃない…それにあの女は結局はお前を利用したのだから…愛は所詮…難しいものだ…」

そう言い、アキラをおぶった

フォック「さて行くぞ…ついでにこの関西弁君の検査も加えてね」

フォック達は空間の狭間を抜けていった

## 第１０話　愛とは（後書き）

愛というのは難しいものです

俺は色々あってか、愛には無縁な感じですけど（汗）

次回はゴットホスピタルへと行きます

## 第11話　ゴットホスピタル～力は守るべきものに～（前書き）

はい！ついにです

レック「ゴットホスピタルの事がわかりますよ」

ゼロ「なんかすげぇ不安だが（汗）」

さあ～どうだろうね～（黒）

ゼロ「お前（汗）」

ではどうぞ♪

## 第11話　ゴットホスピタル～力は守るべきものに～

フォック達はある建物の前にいる

そこは何棟かある大きい建物だ、色は金色と白だ

フォック「ついた、ここがゴットホスピタル、異次元の旅人などはここで一度検査をするんだ」

ゼロ「それにしてもでかいな（汗）」

ゼロはこの建物のでかさにあせる

フォック「まあでかいけどね、ここは色んな治療や死んでしまった人が生き返るかどうかのをしているんだ、まあ蘇生できる人はかぎりがあるからね」

どうやらここは死んでしまった者などが蘇生できるかどうかの病院のようだ

フォック「そんじゃあ中に入るぞ」

フォックはさきほどの戦いで回復して気絶しているアキラを抱えて病院へと入った、続けてゼロとレックも病院へと入った

……

病院内へ入るとそこには

ゼロ「すげぇな、ポケモンとかがいる」

それぞれポケモンが診断などを待っているようで、他に一部人間もいる

フォック「ここは、ポケモンだけでなく、別の世界からここまで来る人間などもいる。俺は元は『ディセンダー』だから色々検査しないといけないし」

レック「僕はポケモンでもあるから」

フォックとレック、それぞれ力があるが個人的に違う感じもある

ゼロ「なあ？その『ディセンダー』ってなんだ？」

ゼロは不思議に思い、フォックに質問した

フォック「『ディセンダー』は元は何処かの世界で世界が災厄に訪れたとき、世界樹がそこから記憶がないまま作られた選ばれし者のことだ、俺は過去に知ってしまったんだ…俺は元は別世界のディセンダーでポケモンになったのも何かの衝撃でポケモンの世界に俺はヒトカゲになってそして…何も思い出せなかったが…あることがあってか俺は今でも世界を見て、そして世界が苦しめないように…」

それは重いようで苦しいようだった

ディセンダー、フォック自体もあの時知らなかったことだ

フォック「とりあえずこの話は置いといて、行くぞ」

フォック達は受付に向かった

……

フォック「すみません、検査予約に来たフォックと」

レック「レックです。僕達の検査というか見てもらいに来たのですが」

受付でナース姿の一匹のポケモンが出てきた

つぶらな青い瞳で尻尾はふわふわした白い綿のようなもの、ヒヤリングポケモンのタブンネだ

タブンネ「お待ちしておりましたフォックさん、レックさん」

タブンネはおじぎする

フォック「それと…追加でこいつを見てもらえますか？」

こいつとはアキラの事だ

タブンネ「わかりました、ではしばらくお待ちください」

フォックは待合室で待っていることに

……

フォック「はあ～」

レック「こっちでないと僕達の検査できませんしね」

彼等も時に検査は必要なのだ

ちなみにアキラは気絶したまま今検査している

？？？？「フォックさん！」

フォックの出番が来たようだ

フォック「俺呼ばれたから行ってくるね」

フォックは診察室へ

## 第11話　ゴットホスピタル～力は守るべきものに～（後書き）

『ディセンダー』という言葉は過去話でも書きますので

ゼロ「それにしても豪華に思えるんだよな～」

そうしても病院は病院だからな

レック「次回は検査ですね」

そして新キャラ登場です。後に過去話でも登場はします

## 第１２話　反転使い（前書き）

はい、新キャラの登場です

レック「しかも今度はあの力ですね」

うん、ではどうぞ

# 第12話　反転使い

フォックは診察室に入っていった

そこには

???「あら、フォック君」

診察室で一人の少女がいた

少女は金髪の長い髪に白衣を着ていた

フォック「久しぶり、セイナ」

セイナ「こちらも久しぶりね、こっちの方でも活躍は聞いたわ」

セイナと呼ばれた少女は活躍の事を聞いていた

フォック「まあそうだろうね…こっちの方でも忙しかったし、まあ今日は検査に来たんだけどね」

あくまでフォックは検査のため来ている

セイナ「あ～あ、私も行きたいわ」

セイナが羨ましそうに言う

フォック「それより検査お願い」

セイナ「わかってる、それじゃあ横になってね」
フォックは診察室にあるベットに横になった
セイナ「それじゃあ始めるわ」
セイナが両手をそえる
すると両手が紫の何かをまとった
セイナ「う〜ん…少し疲れもありそうだけど…異常はないようね」
フォック「ありがとな、さすがは冥界…反転世界のポケモン、ギラティナの力を持つ『ディセンダー』だな」
そう、セイナはギラティナの力を持つディセンダーだ
セイナ「そうね…そしてそのアルセウスの力を持つのが…」
フォック「…俺のもう一つの隠された能力をね…あれは緊急でしかできないからね」
どうやらフォックには時の力だけでなく、アルセウスの力を持っているようだ
セイナ「でもそれは」
フォック「わかってる…もしもの時に使うからね」

もしもの時…きっとバンバン使うものではないようだ

フォック「俺も…あの力は死んだアルセウスから受け継いだものだし…それにディアルガやアルセウスは…俺の中にいる…もう声は聞こえないけどね」

と、フォックは自分の胸を軽くたたく

セイナ「そうね…さて検査は終わりよ、特に異常はないけど…少し休んだほうがいいわね、時の力だけで精一杯だったでしょ？」

フォック「そうだね…あれは別に負担はないけど…アルセウスの力は負担がかかるんだよね～」

どうやら力の負担はそれぞれ違うようだ

セイナ「私はギラティナの力あるけど…アルセウスの力はフォック君のもだから」

フォック「でもこれは守るべきことに使う…勝手にされた奴など利用されてたまるか」

静かにフォックはそう言う…

自分の胸の中で…魂の中で生きる神と呼ばれしポケモンに

……

ゼロ「おっ！おつかれ～」

ゼロはのんきに自販機の紙コップで飲めるのを飲んでいた
ちなみにコーヒーだ
レック「先輩どうでした？」
終えたレックが言う
フォック「ああ、少し疲れあるけど異常はないよ…休んだほうがいいみたい」
レック「そうですか」
フォック「レックはどう？」
フォックはレックの結果はどうかを聞く
レック「僕は脳とかに色々と異常あって、さらに空間の力を一度封じられたこともあってか注射してきたんです」
レックの腕には注射されたところに包帯が巻かれていた
フォック「まあ俺はあっちの方があってかお前に頼んだんだけど…やっぱあれか？」
レック「はい…あの精神的な攻撃で頭が割れそうでいたかったですし…それに吐きそうでしたから…ここまで僕がやられるなんて」
レックは何かやられたことを思い出していたらしい

フォック「失敗はあるけど…それでも次はこうならないようにもっと強くなればいいよ」

フォックはレックを励ます

レック「そうですね…僕ももっと強くならないと…またあの時のようになる…それに空間の力を封じられてさらには負けた…だから今度はもっと僕も強くならないと…」

レックは悔しそうになる

レックは拳を強く握り締める

ゼロ「（何かあったんだな）」

ゼロは何かあったように思った

フォック「それじゃあ後はあの関西弁君の方だ」

フォック達は診断中のアキラも元へ

## 第１２話　反転使い（後書き）

検査も必要な感じですよ

セイナ「そうよね…そして初めまして、私は反転世界のポケモン、ギラティナの力をもつセイナよ」

レック「セイナさんも第３の異次元の旅人だけどね」

そのうち出番は来るようにはするけどね

セイナ「私も一緒に行きたいな」

まあまあ、次回はアキラの方になります

## 第１３話　立ち上がれる心（前書き）

検査編の方終わりになります

レック「それにしても僕も色々甘かったですよ…」

まあたしかに、ここから強くならないとね

レック「はい…」

ではどうぞ

## 第13話　立ち上がれる心

第3診察室前

一人の白衣の男性が出てきた

そこにフォック達がいた

フォック「あの、アキラの方はどうですか？」

男性「ふむ、キメラ能力とは…こちらで血液採取したんだが同化しているようだ、まあ命には別状はないようだ、それにキメラの超再生能力が再発したためか治りが早いようだ、彼なら今休んでいる。会いに行くかい？」

フォック「お願いします」

フォック達は診察室へ

……

第3診察室

アキラ「なんで俺がこんな目に合わなきゃなんないんや…」

アキラはふてくさそうに病院の窓を見ている

ちなみに診察室の診断ベットでしばらく外の景色を見ている

アキラ「（フォック…あいつの強さは本物やった…元ポケモンリーグチャンピオンの俺でもあいつの強さは通じへんかった……俺…情けないやん…あいつを…守れなかったのが…）」

アキラはいつの間にか目に涙がこぼれる

アキラ「（俺…あいつが好きやったのに…あいつに裏切られても…愛してる…でも…俺…どうしたらえんや…）」

どうしたらいいのかアキラ自体、愛というのは難しいものだ

そこに

フォック「お～い」

アキラ「なっ！？フォック！？」

アキラは驚いてしまう

フォック「何驚いてるんだ？」

アキラ「な、なんでもない！ってか何しにきたんや！俺を笑いに来たんか？」

フォック「別に笑いに来たわけじゃねぇよ、テメェの様子を見に来ただけだ…とりあえず話ではなんとか入院送りは免れたようだし」

フォックはふてくされたような態度で言う

そこにレックやゼロも入ってきた

レック「さすがゾロアークのキメラだね…傷があっという間に治っていってる」

ゼロ「（うわぁ～こいつを実験につかいてぇ～）」

ドガッ！

フォック「変なこと考えるな」

ゼロ「ひゃい（泣）」

ゼロはアキラに何かしようと企むがフォックの鉄拳制裁によって鼻血が出てきた

アキラ「俺はキメラなんや…でも…俺…どうしたらええんや…フォック、お前に負けて…」

すると

フォック「じゃあ一緒に俺のとこに来いよ、お前には色々と罪償いのために働いてもらうからな…まあ愛というものを一から学んだほうもいいしな…それに…」

フォックはなぜか微笑みをかける

フォック「仲間がいれば一人では乗り越えられないことも乗り越えられるからな」

アキラ「仲間か…そりゃおもろいな…なら俺はもう大丈夫なんやろ

？だったら行こうや、だがまだお前を信用しとるわけやないからな！」

アキラはベットから降りる

フォック「そうこねぇとな…まあそのうち…だけどな」

ニィっとフォックは笑う

## 第13話　立ち上がれる心（後書き）

難しいものだな～

レック「何がです？」

愛とか

レック「先輩には愛には無縁みたいな感じですしね」

色々あってね…次回は我が家に戻ります

## 第１４話　逆鱗とレックの特訓（前書き）

今回はちょっとレックのつなぎ話になります、もちろん特訓ですが

レック「なんだろう？」

それでは第１４話をどうぞ

# 第１４話　逆鱗とレックの特訓

時間と空間の境目

そこにはフォックの家があった

アキラ「なんかシンプルやな～」

アキラはもっと豪華だと思っていたらしいが唖然とした

フォック「とりあえず入るぞ」

そういうとレックとゼロもついてきて入っていった

……

フォック「ただいま～」

？？？？「おかえり～」

？？？？「おかえりなさい」

出てきたのは二匹のポケモンだった、一匹はピンクの体色に尻尾がふわふわした綿のようなものがついたポケモン、もう一匹はＶ字の額で子供っぽいポケモンだ

それぞれヒヤリングポケモンのタブンネ、勝利ポケモンのビクティニの二匹だった、タブンネの名はヒヤリル、ビクティニの名前はビ

クト、フォックのポケモンである

フォック「トレーニングなどで帰ってきたけどこっちはどうだった？」

フォックが様子などを二匹のポケモンに聞く

ヒヤリル「こちらは異常はないですよ」

ビクト「異常な～し♪」

異常はないようだ、ビクトは笑顔で言っているが彼はいつもこうなので気にしない

ヒヤリル「そういえばそこの黒い髪の人とそちらの薄白い髪の人は？」

ゼロとアキラの事を言っているようだ

フォック「ああ、紹介がまだだったな、薄白いほうがゼロ、黒い髪の方が関西弁君」

アキラ「あ～わいがそうや…って！誰が関西弁君やねん！！」

アキラがノリツッコミを入れた

フォック「冗談、アキラっていうんだ」

ヒヤリル「よろしくお願いしますね、私はタブンネのヒヤリルです」

ヒヤリルがおじぎをした

アキラ「あ…よろしゅうな」

ゼロ「よろしくな」

とりあえず二人は挨拶した

フォック「とりあえず…トレーニングルームに行くよ」

フォック達はトレーニングルームへ

ビクト「僕も行く〜♪」

ビクトもついていった

……

アキラ「でっかいな〜結構広いんやな」

フォック「まあね」

トレーニングルームはかなり広かった、それぞれバトルフィールドがあり、フィールドが様々になっている

フォック「さてと…早速といきたいけど…その前にレック…報告とかあるよね？」

フォックは視線をレックに向ける、レックは動揺していた

レック「え…え！…」

なんか様子がおかしいようだった

フォック「動揺しているけど…何か隠してない？」

レック「う…さすが先輩ですね…勘が鋭い（汗）」

時にフォックは勘が鋭い時があるのだ、今回も何かレックが隠していることに気づいたフォックがレックに問いただしたのだ

レック「しょうがないですね…実は…」

……

フォックは驚いていた

しかもそれはフォックにとっては…逆鱗に触れる内容だった

その内容とは……

レックは別の世界である一匹の機械のポケモンと対峙していた

レックが言った世界はポケモンが住む世界だが…ある組織によって支配されているためレックがこっちの世界の方を担当していた。ちなみにフォックはアキラがいる世界にいるためまだ片付いていないのだった

そしてなぜそれがフォックの逆鱗に触れるものなのかというと…

それは…

フォック「そのコクマーというヨルノズクの機械のポケモンに…俺の技が使われたり…しかもレックの技などを…」

フォックの目が真剣どころか怒りがこもったような目になっていた

レック「はい…本当は先輩の逆鱗に触れるからこれだけはあまり報告したくなかったのです。僕の責任です…」

レックは悲しい暗い表情をしていた

ゼロ「機械ポケモン…そんなのが」

アキラ「なんかキメラ技術とはちょっと違うようなもんやな～しかもフォックの技とか他の技まで使うとは…厄介なやっちゃな～だけどそれはもう解決したんやろ？」

レックは頷いた、もちろん解決はしたのだが

レック「これは色々報告することになっていて…相手のことなど色々と…先輩は知りたいことがいっぱいあり…知識として報告も重要なものなんです」

フォックは知りたいことがある

勘は鋭くても…分からないことになるのは嫌なのだ、だがフォックの逆鱗はおさまるものではない

フォック「あの野郎…解決したのはいいが…俺の技を悪用してレッ

クの『記憶』から俺の技を使いやがって（黒激怒）」

フォックは怒っていた…本来自分の技は悪用に使うような技、味方を倒す…または殺すような技ではないのだ

フォック「俺の技は本来は敵を倒すために俺が努力を重ねて考えて習得した技たちなんだ…秘奥義まで使われたのは…俺にとってはな…特に…（怒）」

秘奥義は奥義のさらなる奥義の技…自分の力を解放して放つ…言わば究極の奥義とも言える奥義なのだ、だがレックは今回の事で…フォックにこのことを伝えればフォックの怒り…もとい逆鱗に触れるものなのだ…だがフォックは

フォック「どうやら…解決しても別の奴が同じ技などを使われる可能性もある…そうなると対策というのも考えないといけないな…」

レック「すみません先輩」

レックは謝るが

フォック「お前のせいじゃない…悪いのは…俺の習得した技を悪用して利用されたあの機械ポケモンだ（怒）俺は使われてキレた…俺はそんな風に仲間を傷つけたくなかった！！なのに…」

フォックは叫んだ、技は味方を傷つけたくなかった…だが使われたことにフォックは怒りと悔しさ…そして悲しさを感じていた。フォックの目には涙が落ちた

レック「先輩…」

レックはただ見ていることしかできなかった、他の二人も同じだった

フォック「……でも」

フォックは涙を拭く

フォック「このまま利用されてさらにこういう奴等がこれ以上自分達の技を好き勝手に使わせない！！」

フォックはなんとか立ち直った

フォック「なら…レック！対策など色々と特訓だ！いいね！」

フォックの勢いの声にレックは驚くが

レック「はい！」

レックは返事をした

フォック「なら…俺の技など色々と対策と特訓しよう…そしてレックはさらに秘奥義を習得するんだ」

レック「わかりました」

アキラ「しゃあないな～」

ゼロ「どうせ手伝うしかないな」

やれやれとゼロとアキラも手伝うことに

フォック「（偽者の技ごときで…俺を舐めるなよ！！）」

フォックはそう誓った

## 第１４話　逆鱗とレックの特訓（後書き）

今回はレックがコラボしているアブソル先生の作品『サイバネティック・パートナー』の方を少し拝借しました。アブソル先生ありがとうございます

レック「先輩のオリ技は、先輩の思いと努力の結晶ですから」

本物の技は本人が使用するもの、コピーで負けたら…本物の立場がなくなるしね

アキラ「フォックの逆鱗怖かったわ（汗）そこまでやるっちゅ～のか（汗）」

俺の技は俺の技だ、他人の技は他人の技なのだから

ゼロ「なぜジャ○ア○（汗）」

次回はそんな対策と修行です

## 第１５話　対策（前書き）

え～今回からは特訓になります

レック「対策ですか」

そう、そしてお前等も手伝えや

アキラ「結局俺等も手伝わなきゃあかんねん（汗）」

ゼロ「もう嫌（泣）」

レック「そんな第１５話をどうぞ」

# 第15話　対策

バトルフィールドではフォックとレックが立っていた

フォック「それじゃあ始めるよ」

レック「お願いします」

レックは頷いた

フォック「光の剣雨！」

レックの頭上から神々しい光の剣が降り注いだ

レック「くっ！」

レックは傷つきながらも避ける

フォック「俺の技は本来攻撃威力が高いし、追加攻撃もある技が多いんだ…まず俺のもっとも使う技光の剣雨はいくつもの光の剣を降り注ぐ技だ…範囲も広いため避けるのには一苦労だ」

範囲が広い光の剣雨はまさに剣の雨を降らす技なのだ、範囲も全体的なので難しいのだが

フォック「だがこれは連続的だけどよく見切れば避けられるし…そしてかなりの防御でないとこの技は防ぐことはできないんだ」

作った本人がいうのだから自分の技も把握するものだ

レック「なるほど…先輩はよく自分の技を把握しているんですね」

フォック「相手が使ってくることも考えないとやられる…つまり自分の技をよく理解すること、相手はたとえ同じ技を使っても結局は偽りの技だ…本物は…自分自身が努力を積んで習得した努力の結晶だ…だからよく理解してから技を出すタイミングを考えるんだ」

フォックがいえることは…技はタイミングや状況によって使い分けることだ…それによって相手は同じ技を使っても何処かで狂ってしまいやられるのだ

アキラ「そういうことだったんやな…俺もそうしらへんかったから…」

ゼロ「よく見ているんだな…」

フォックはよく見ているのだ、知ることを知りたい…相手をよく見て…隙を見せてから突くようなバトルスタイル…勘も鋭いためか何処かで当たることもある…それがディセンダーである彼…フォック自体なのだから

フォック「でも俺はまだまだだ…色々と見ておいておかないと…先が見えないから」

レック「先輩…」

レックは拳を強く握った

レック「とりあえずはわかりました…でも秘奥義とかは食らう感じ

もありますがあれは対策不可能じゃないですか？」

秘奥義とかは対策不可能とレックは言うが

フォック「とりあえずはその秘奥義によって防御か特防（魔防）をあげとけば多少のダメージは軽減はできる…俺の第１秘奥義であるファイナルセイントは魔法攻撃だから」

秘奥義には大きく色々あるのだ、その特徴を見ていけばダメージを軽減できることは可能なのだ

フォック「後は特訓しながら知識を身につけていけば問題はないし…初めての相手の場合はよく見てからの方がいい…どうせめてくるのかわからないからな」

油断はできないものだ…バトルや戦いにとって重要なのは観察力などだ

経験がものをいうものなのだから

フォック「それじゃあ特訓の続きをするぞ」

レック「はい！」

二人は接近する

## 第１５話　対策（後書き）

自分の技を対策すれば…同じ技を使った相手でも見極めるものだよ

レック「さすが先輩…技を作った本人だから言えることですね」

そう、俺の技は俺の技なのだから…自分の技とかも把握しておかないと相手に負けるようなものだから

アキラ「たしかにそうやな（汗）」

ゼロ「俺はいつもやられてるけどな（泣）」

## 第１６話　高みを目指して（前書き）

レックの修行の続きです

ではどうぞ

# 第16話　高みを目指して

フォック「光の剣雨！」

レックの頭上から神々しい光の剣が降り注ぐ、だがレックは

レック「はっ！やっ！ほっ！」

それを軽々と避ける

修行してまだ1週間…少しずつであったがなれてきたのである…そして彼の体にも変化があった…まず体つきが少しごつい感じになり…人間時とポケモンの姿を見てもかなり体つきがよくなっていた…腕の筋肉も力強く…足の筋肉も少し太くなっていた、もちろんそれだけではなかった

レック「ウォータルソニック！」

技も前と比べて威力が少し上がったのだ…まだ秘奥義はできていないのだがレックの体のあちこちには傷跡が数個もついていた…それほどの特訓だろう…そして彼等もだった

アキラも来てから少しずつ強くはなっていた。だがまだまだフォックには勝てないほどだ

ゼロは他の2匹と少しずつなついてはいた…だが色々とやられるところは変わらないが…

フォック「行くよレック！集いし光よ！今ここに集まり制裁せよ！ファイナルセイント！！」

フォックの第1秘奥義ファイナルセイントがレックを襲う

レック「くっ！…僕は…負けるわけにはいかねぇ！！」

レックはダメージを受けるが

レック「はあ…はあ…」

体中傷だらけでボロボロだが耐えた

フォック「とりあえず休憩しよう」

レックと他の二人が頷いた

……

レック「それにしても…まだあの秘奥義は効きますよ～（汗）」

フォック「まあ秘奥義は色々あるけど全体系の秘奥義は避けられないからこうしてダメージを半減できるようにしないと耐えられないしね」

普通の人なら死に繋がる危険な修行なのだ…秘奥義はある程度らへんのダメージもあり…その人の強さにもよるのだ

アキラ「でもフォックの秘奥義やったか？あれは結構きつかったで（汗）」

キメラでも超再生能力をもっているアキラが言う、そういう者も実際は耐えられるほどなのだから

フォック「まあ程度もあるけど後はなんとか耐えられるように抵抗力を身につけないとな」

守りなどもあるからこそ…攻撃に耐えて反撃の手段を考える…同じ技でも人によってそれは違うのだから

フォック「さて…とりあえず傷を治してから再開だ…キュア！」

フォックはキュアの術でレックを回復させる

ゼロ「でも不思議だよな～お前の回復魔法と術の豊富さは」

フォック「俺は回復系統が主になんだ…備えあればうれいなしだろ」

そう言うフォック…それがフォックのいいところなのだから

そんなこんなで特訓を再開した

## 第１６話　高みを目指して（後書き）

色々人によって技も違うものと同じものもあるものです

レック「でもかなり耐えるのは厳しいですよ…僕も空間の力とか色々と特訓内容もハードですし」

まあ熟練度を積むことだよ…まだまだ続くけどね

## 第１７話　新たな仲間と動き出す闇（前書き）

今回は新たな仲間が加わります

レック「それは一体誰ですか？」

実は赤き龍の旅でも登場しています、そんな第１７話をどうぞ

## 第17話　新たな仲間と動き出す闇

それから1ヶ月が経過した

フォック「光の剣雨！！」

フォックが神々しい光の剣を上空から放つ、それがレックの頭上から来る

レック「はっ！」

レックは剣の落下地点を見極めて避けたり自分の斧で防ぐ

レックの斧は変わっていた、斧の腹には水をあらわした絵が描かれていた。さらに斧自体がすきとおった青い色をしていた

レック「ウォータルソニックV2！！」

レックはウォータルソニックをさらにパワーアップさせた、水の衝撃波が光の剣にぶつかり…光の剣とともに消滅した

フォック「ネガティブゲイト！」

レックの周りから魔空間が現れてレックを閉じ込めた

レック「守る！」

レックは守るで防いだ、そこからレックは

レック「エレメントラスト！」

斧を振り下ろし、そこから丸い衝撃波を放つ

フォック「バーンストライク！」

フォックは火炎弾をレックの攻撃に当てる…丸い衝撃波は地面の強力な爆発と火炎弾によって打ち消された

レック「（エレメントラストは弱点属性を相手にぶつける技…さすが先輩…バーンストライクは炎属性なのに打ち消すなんて…ヒーラーだけでなく魔術もよくなっている）」

レックは気づいていた。レックだけが変わったわけじゃない…フォック自体も強くなっていることを

アキラ「ホンマこんだけぎょーさんやるとはな～」

ゼロ「あいつらもはや強いという領域超えてるぜ（汗）」

バトルを見ている二人は唖然とする

レック「（それでも！）亜空連弾！」

レックは亜空切断を凝縮して数発も放った

フォック「くっ！」

フォックはダメージを追いながら防ぐ

フォック「癒しよ…ファーストエイド！」

フォックは回復の術であるファーストエイドで傷を治した

フォック自体ヒーラーとしての能力もあり、それほどの回復量を持っている…前にアキラと戦って傷を癒したのも…フォック自体がヒーラーだからできることなのだ…フォック自体攻撃の術は炎属性とかだがそれぞれまだ習得していない術も覚えようとはしている。だが回復系の術や魔法などは豊富なため詠唱も速い…回復はフォックにとってはなくてはならないものだ

フォック「いい感じになってきたなレック…」

フォックはレックを褒める

フォック「だけど俺も行かせてもらう！鋭き風の刃よ！エアスラスト！！」

今度はレックの周囲に風の刃を発生させた

ズシャッ！

レック「ぐっ！」

レックは風の刃を受けて傷ついてしまった。そこから少し血が流れる

レック「ミラージュメテオ！！」

何処からか色んな色を帯びた隕石が降り注ぐ

フォック「（厄介だなこの技は）」

レックのミラージュメテオは何処から来るのかわからない技…それはまるで鏡の何処に出てくるのかわからない技なのだ

フォック「（空間の技だから…とりあえずやるしかないな…）静寂の時間よ…今ここに！！秘奥義！タイムストップ！）」

突然時間が止まり、背景が青くなり…さらに他のみんなも動かなくなった

フォック「動かない今がチャンス！散沙雨！！」

フォックは連続で突きを繰り出した。

レック「……」

レックはタイムストップの影響で動きは止められていて動けない、それもそうだろう…フォックの秘奥義はかなりの大技や補助と回復の秘奥義などがある…その一つが時間系の技で時間を停止させる秘奥義タイムストップ

この秘奥義は時間を司る者は一部の者が習得する秘奥義である。時間は使う者によるが…フォックは大体5秒あたりぐらいが限界だ…秘奥義でもそのぐらいの時間があれば十分なものだ

レック「くっ！」

レックは時間の呪縛から解放されたがいたるところに生々しい傷が

いくつも出来ていた

レック「（やはり時の力を持つ先輩にはかなわないな…タイムストップは補助系の技で時を使う者にしか使えない秘奥義だから…実際アルセウスの力も持っている先輩でも…あの力は緊急のための力だからむやみに使わないですし…）」

レックはそうフォックを見る

レック「（とりあえず回復しないと）集気法（しゅうきほう）！」

レックは体に力を入れた、するとレックの傷はみるみるうちに治ってきた。集気法は自分の体の気で傷を治す技だ、こういう傷を治す技もちゃんと持っている

フォック「やるね…それでもこれを忘れるな！レイジングミスト！」

レックの周囲から熱霧が発生してレックを覆う

レック「（やばい！？）」

レックは避けられずダメージを受けてします

レック「（くっ！さすが先輩の術…水タイプの僕でも炎が通るほど…）」

レックは熱霧でダメージを受けたがまだまだ大丈夫のようだ

フォック「レイジングミストに耐えるなんてね…でもちゃんと見切ることも大事だ、このぐらいでへばらないよね？」

フォックはレックにへばっていないかを聞く

レック「大丈夫ですよ先輩、このぐらいで僕は倒れませんし」

見学で見ているアキラとゼロは

アキラ「ホンマレックといいフォックといい…体が頑丈やし、さらに魔法とかどんだけやねん（汗）」

ゼロ「むしろ楽しそうだな（汗）」

呆れるほどになる二人

レック「ここからが本番！行くぜ！！」

レックはなぜか人格が変わった、そりゃあそうだろう…彼にはもう一人の人格が宿っているのだから

レック「オラァ！！火炎裂空！！」

レックは炎をまとって縦回転してフォックを斬りつける

フォック「守る！！」

すかさず守るで防ぐ

レック「打ち砕く！！獅吼滅龍閃！！」

だがレックは攻撃を手を止めずに斧を振り回して守るをやぶってフ

ォックにダメージを与える

フォック「ぐわっ！？」

フォックは吹っ飛ばされる

フォック「やるな～」

レック「でもここからが本番だ！！先輩！！」

レックは斧を構える

レック「空間よ！流れる中にすべてを切り裂く刃となれ！亜空滅牙斬！！」

レックは高くジャンプして縦上下にフォックを斬りつけ、さらに闘気をこめて連続で斧を振り回し…フォックを吹っ飛ばした

フォック「ぐはっ！？」

フォックはぶっ飛ばされるが

フォック「癒しの力よ…すべてを癒す力となれ…キュア！」

フォックは咄嗟に詠唱して回復させた

レック「はあ…はあ…」

レックに息があがる

フォック「ふう～どうやら疲れてきたようだな…それじゃあ休憩しよう」

レック「はい…」

普通のレックに戻ってレックとフォックは休憩することになった

……

レック「やっぱ先輩は強いな～」

フォック「まあ俺もまだまだだよ…それにヒーラーとしてのもまだまだだし」

アキラ「あれでまだまだってわけかいな!?」

アキラは驚く

フォック「俺はアタッカーとヒーラーの組み合わせたのだから、こうじゃないと俺のしょうに合わない」

ゼロ「その割には魔法とか使うじゃねぇかよ（汗）」

たしかにフォックは魔法や術が使えるのだが

フォック「だけど他の属性の術は習得していないからなんとかしないとね…使えるのは光・炎属性の術と魔法だから」

フォックの魔法・術は主に光属性とリザードン自体の炎属性、さらに風属性も少々使えるのだ…もちろん闇属性の魔法も少々使えるよ

うであった

フォック「さて、それじゃあ続きをやるよレック」

レック「はい！」

再び特訓を開始したその時

ヒヤリル「フォックさん！」

ヒヤリルが駆けつける

フォック「どうしたの？」

フォックがヒヤリルに聞く

ヒヤリル「お客さんが来ていますのですぐに」

フォック「わかった…レックはここで自主トレしていてくれる？」

レック「わかりました」

フォックはトレーニングルームを出た

……

居間に着いたフォック、そこには

フォック「あれ？ゼサロじゃん」

そこにいたのは一匹のポケモン、黒い体色にジェットエンジンのような尻尾のポケモンだ…こくいんポケモンのゼクロムだ

ゼサロ「よっ！」

ゼサロと呼ばれたゼクロムが挨拶する、そこに

ハクラン「ゼサロか…」

ハクランが来た

ゼサロ「よう！ハクラン」

フォック「お前たしかNの所にいたはずじゃないの？」

N…元々はプラズマ団のボスであった青年であったが…フォックの手で解決したためゼクロムであるゼサロと遠い地方へと旅立っていった…しかしそのゼサロ自体はここにいる。その理由は

ゼサロ「ああ…だがNから『僕は大丈夫だから君はフォックのとこに行ってフォックを助けてくれ』ってな…あいつとは別れてお前等のとこに来たんだよ」

どうやらNがゼサロをフォックのとこに預ける形になるようだ

フォック「なるほどね～…それはいいけど俺はハクランがいるし…お前の新たなパートナーを見つけるのもな～」

そんな考えをしていると

レック「先輩！」

レックが現れた

フォック「どうしたの？レック」

レック「ちょっと気になっていたので様子を見に来たのですが…まさかゼクロム自体出てくるなんて」

レックはちょっと驚いていた

ゼサロ「ほお～こいつはちょうどいいかもしれねぇ～な～…なあそこのお前…」

レックはゼサロに呼び出される

レック「なんですか？」

ゼサロ「俺がお前のポケモンとなってやるよ」

突然ゼサロはレックの仲間になりたいと言ってきたのだ

レック「でも元は別のトレーナーのですよね？」

しかし

フォック「いや、そのトレーナーは俺を助けるために来てくれたんだ…ならレックにゼサロを預けたほうがいいと思うんだ…俺はハクランいるし」

レック「なるほど…ならこれからもよろしくお願いします…僕はレック…先輩と同じフリーディセンダーでパルキアの力を持つ者です」

レックは自己紹介し、ゼサロも自己紹介する

ゼサロ「よろしくなレック、俺はゼサロっていうんだよろしくな相棒」

こうしてゼサロを仲間にした

……

一方……

ここは何処かの世界

そんな中一人の男がいた…だが黒くて誰なのかわからなかった

？？？？「……」

男は無言だった、そんな男の目の前には3匹のポケモンが水晶で動けなくなっていた。一匹は透き通る青い体色にダイヤモンドのような体に胸には輝かしい青い宝石がついているポケモン、一匹は両肩にはピンクの宝石に鋭い目つきで薄いピンクの体色をしたポケモン、そしてもう一匹は黒い翼膜が薄い翼に鋭い目、さらにムカデのような6つの足を持つポケモンだ

？？？？「今こそ世界を…そして…世界樹を…」

男はそのように言う…

水晶に封印されているのはディアルガ、パルキア、ギラティナの神と呼ばれしポケモン達だった

???「滅ぼしてやろう…この手で！」

狂い始めた歯車が…今動き出そうとしていた…後に運命が交差する戦いが…始まろうとしていた

## 第17話　新たな仲間と動き出す闇（後書き）

ハクラン「まさかゼサロが仲間になるとはな」

ゼサロ「まあこれからもよろしくな！」

そんな次回は少しずつですが展開を色々変えていこうと思います。

ゼサロ「不安だらけに思えるがな」

おい（怒）

## 第１８話　悪の理由（前書き）

さて、今回少しシリアスになります

## 第18話　悪の理由

ゼサロを仲間に加え

「今日はもう休むよ」

フォックの言葉でレック達は頷いた

……

「……」

フォックは一人部屋で何か考えていた。そんな時、部屋のドアから

コンコンとドアをノックする音がした

「どうぞ」

部屋に入ってきたのは

「お～すごい部屋やな」

アキラだった

「どうした？眠れないのか？」

フォックがアキラに眠れないのか聞く

「いや…ちょっとお前と話がしたかったんや…なんかフォックが悪

にはなんか容赦ないように見えてきてな」

「そうか…俺もちょっとそれで悩んでいた」

「ほ～めずらしいな～ディセンダーであるお前が悩むをもってるちゅ～なんて」

フォックにしてはめずらしかった、悪に容赦ないことに悩んでいたのが

「俺は色々と悪い奴等を見てきた…アキラ…お前も入るが…だが俺は逆に悪に思えてしまうんだ」

「まあたしかにそう感じるんやと思うちゅ～わけやし…でもそんなことで悩んでいるお前がなんだか普段より違った印象があるんやと思うし」

悪も悪なりのものもある

「俺は理由ない悪っているのかどうかもわからない…だがお前にもあるんだろ？あいつが好きだったから…」

「まあ～たしかにそうやな…俺はあいつに捨てられた…だけど…あいつは俺を脱出させようとボードを用意してくれた…あいつにとっては俺は実験体なんや…」

キメラという実験体というのが…彼はすべて捨ててしまった…

「でも俺はうすうすあいつのやってる事が悪いのではないかと…思ってしまうんや…だけど結局は…」

「いや…俺もわかったよ…」

フォックは座っていたいすから立つ

「あいつは元々家族を神と呼ばれしポケモン達によって失ってしまった…それが自分に悪を生み出して狂気となってしまったんだと…あっちのディアルガも『何が神だ！』と言っていたんだ…自分達が間違っていたことを…神と呼ばれしポケモンでも…自分達が悪いことしてしまったと深く反省とかしていたんだ…俺もあいつが嫌いなのは変わりない…でもわかることは…悪にはそれぞれ理由がある…それに理解できればわかってくれるし…こうして仲間にできないと俺は思う」

「お前らしいやな」

自分が行った世界とかも悪はいる…誰しも間違いや悪はあるのだから

「ただ俺はやりすぎることがある…それが悪に繋がってしまうと不安があるんだけどな…」

自分がやってきたことが疑問に思ってしまうフォック

「でもな～俺もそう思ってるで？俺もあいつの事で疑問におもっとるし…でもな」

アキラが一息つけて

「変えていける…俺もお前と一緒にいれば何か変われる感じがするんや…俺も…すべて捨ててしまった…だから俺も…」

「アキラ…」

静寂が部屋を包み込む

「そうだな…俺もよく考えて悪者とかを見ていくよ」

「まあそうやな…さて俺は寝る、そんじゃ」

「おやすみ」

アキラは部屋から出た

「悪者でも…理由なしの奴等はいないよな…失敗してもやる奴もいるし…俺も受け入れるように努力しないとな…」

そうしてフォックはベットに飛び込んで眠りについた

## 第１８話　悪の理由（後書き）

悪人は理由もあり…ないのかもしれない…ホントのところはどうかわかりませんが、理由がある者もいるようです。

ただ自分も受け入れていなかったかもしれません、その気持ちで書いたのですがどうかわかりません

## 第１９話　水の聖獣（前書き）

レック「このタイトルは？」

今回はテイルズからあのキャラを登場させました

アキラ「なんやあんさんも趣味がかわるな～（汗）」

はまっていくものだよアキラ

アキラ「そうなんか（汗）

# 第１９話　水の聖獣

次の朝

フォック「ふわぁ～…もう朝か…」

フォックは眠たそうな顔をしていた。

フォック「朝食とか作らないと」

眠たそうなままリビングへと向かった

……

レック「Ｚｚｚ…」

レックはすやすやと寝ていた。

ゼサロ「おい！朝だ」

ゼサロがレックを起こす

レック「う…う～ん…」

レックは起きた

ゼサロ「フォックが朝食を作った、行くぞ」

レック「あ…はい」

ゼサロとレックはリビングへ

……

リビングにはゼロとアキラが座っていた

アキラ「おっ！おはようさん」

ゼロ「あ～ねみぃ～」

ゼロはまだ眠たそうだ

レック「おはようございます」

レックは丁寧に挨拶する。すると

フォック「おはようレック、今朝食できたとこだよ」

フォックはトーストした食パンと皿にのった目玉焼きをもってきた

レック「すみません先輩」

フォック「いいよ、それじゃあいただこうか」

みんなが朝食にはいる

……

朝食後

フォック「さて…片付けたし…そろそろあいつが来ると思うんだけど」

アキラ「あいつ？」

アキラは頭に？マークが浮かんだ

レック「先輩に水の術や魔法を教える人みたいです。先輩も覚えることが多いので」

ゼロ「でもリザードンだから無理があるんじゃねぇか？」

ゼロはそう言うが

フォック「術や技を極めるのがフリーディセンダーだ…それに魔法剣士でも他の属性の術を覚えれば同じ属性の相手や同じ属性を吸収する相手には有効になるんだから」

そう、炎やメインの属性ばかり使っても相手も属性吸収などで効かない場合もある

フォック「ん？来たかな？」

するとここから何かが接近してきた、それは龍のような生き物だった

頭には長いマフラーが二つついていて、占い師が使う丸い水晶のような青いものがあり、顔はかわいく獣のような姿…それはまるでイルカかそのぐらいのものだった

その生き物はポケモンでもなかった…今その生き物はフォックの家の玄関前に来ていた

ギィィィッとドアが開く、そこにフォックが出てきた

フォック「やあ、久しぶりだねシャオルーン」

???「やあフォック」

シャオルーンと呼ばれた生き物はフォックに笑顔で話す

レック「先輩！」

レックが続けて飛び出した

シャオルーン「やあレック、久しぶり～♪」

レック「シャオルーン！久しぶりです！」

レックもシャオルーンの登場で喜ぶ、さらにドアからアキラとゼロも来た

アキラ「なっ！？なんや！？新種のポケモンか！？」

ゼロ「見たこともないな…一体？」

そこでフォックが説明する

フォック「こいつは水の聖獣シャオルーンだよ」

アキラ「シャオルーン？ポケモンでもないんかいな？」
見た目的にはポケモンという感じではない…だが感じるのは獣っぽい感じに思える
シャオルーン「そう、僕はポケモンじゃないよ…それに僕はフォックの修行相手で来たんだ」
と、シャオルーンは言う、聖獣の割にはむじゃきな感じがある
フォック「それに過去に色々あってこうして来る時が多いんだ」
シャオルーン「でもフォックが連れていかなかったからでしょ？僕も行きたかったな～イッシュ地方」
シャオルーンは行きたがりそうにフォックを見る
フォック「わかったから後でドラゴニックセイバーで人間の姿にして一緒に行かせるから」
と、フォックはシャオルーンをなだめる
シャオルーン「ありがとう～♪」
シャオルーンは嬉しそうに微笑む
フォック「とりあえず中に入って早速バトルしよう」
シャオルーン「そうだね」

とりあえずフォックはシャオルーンを家の中に入れた

……

ここはフォックの家のバトルフィールド、そこにフォックとシャオルーンがフィールドにたっていた

シャオルーン「さあフォック、水の術をマスターできるように僕とバトルだよ！」

フォック「ああ、少しずつ使いこなせているけどまだまだ…でも行くよ！」

二人のバトルが始まる！

## 第19話　水の聖獣（後書き）

はい！テイルズオブリバースから水の聖獣シャオルーンを呼びました。
たというかプレイ動画とか見て、入れたかったんです。

シャオルーン「フォックは好きなの色々だね」

アキラ「なんやその割に子供っぽいやな」

シャオルーン「僕だって色々だもん、それに人が好きだからね♪」

テイルズシリーズのプレイ動画とか見ていたので知っていきました。

レック「先輩も知りまくりですね」

だって知りたいんだもん

## 第２０話　水と炎の戦い（前書き）

久しぶりの更新です。

レック「先輩遅いですよ」

ごめん

シャオルーン「さて、僕に勝てるかな♪」

負けないよ？ではどうぞ

※書き方を変えて見ました。

## 第２０話　水と炎の戦い

シャオルーンとフォックは構えていた。

「いくよ！」

シャオルーンは勢いよく水を放出する

「守る！」

フォックは守るを使って防いだ

「双牙斬！！」

斬り降ろしからジャンプして斬り上げを繰り出す、シャオルーンは双牙斬を受けてしまった

「やるね、えい！」

シャオルーンの水攻撃がフォックを襲う

「荒れ狂う水よ！スプラッシュ！」

水圧がシャオルーンの攻撃を防ぐ

「甘いよ！」

シャオルーンはさらに水圧をフォックに向ける

「うわっ！？」

フォックは水圧を受けてしまいダメージを受けてしまった。炎タイプのため弱点をつけてしまった。

「（やっぱリザードン状態だからダメージがハンパねぇが…そうでないと俺もまだまだ甘いし）」

フォックは立ち上がる

「やるねぇ～体力だけはあるし中々だよ」

「そりゃありがとね…でも負けない」

フォックがシャオルーンに迫る、そこから

「獅子炎破！」

炎の闘気がシャオルーンを吹き飛ばす

「さらに魔神蒼破！」

斬撃と衝撃波を飛ばした、この技は魔神剣と蒼破刃を合わせた奥義だ、フォック曰く魔神剣と蒼破刃と組み合わせた方がいいと思い極めた奥義なのだ

「（すごい！？まさか魔神剣と蒼破刃の組み合わせ技をもっているなんて…）」

シャオルーンは驚いている。

「今度は水月天翔（すいげつてんしょう）！！」

月を描くように水を纏ったDセイバーで斬り上げを3回繰り返しシャオルーンを上空に飛ばした、そこからフォックは詠唱をした。

「終焉の氷結…今ここに落ちよ！インブレイスエンド！！」

巨大な水晶のような氷がシャオルーンに落ちてぶつかる、シャオルーンは目を回してしまい動けない…今がチャンスとフォックが攻めた

「行くぞ！聖なる爆炎！今こそ宿れ！」

フォックは金色を纏い、Dセイバーも金色にまとった

「これが浄化する聖なる爆炎！！聖炎！爆裁斬！！」

フォックの秘奥義、聖炎爆裁斬がシャオルーンに炸裂する。

「うわっ！？」

シャオルーンは火傷してしまった…しかし

「僕も本気出させてもらうよ！」

すると強力な水圧がフォックを襲う、Dセイバーでも吸収できないほどの水圧だった

「（くっ！苦しい！）」

フォックは息苦しさを感じた…体に水が伝わる
「アクエリアスフィア！」
シャオルーンの秘奥義がフォックに炸裂した
「うっ！ゲホゲホ！」
せきをしながら倒れてしまった
「フォック戦闘不能！シャオルーンの勝ち！」
ゼサロが戦闘不能の旗を振る
「うう…やっぱ応えるなこりゃ…ゲホゲホ！」
まだせきをするフォック
「まあ水系でインブレイスエンドは覚えているようだね…さすが」
シャオルーンは笑顔で言う
「まあまだまだだけどこれからがんばっていかないと」
フォックはこの負けでそう誓う
……
「それじゃあ僕は行くね」

シャオルーンは行こうとする。すると

「あ、ついでだけどこいつを元の世界に戻しておいてくれないか？」

ゼロを引き連れてそう言う

「わかった、で？何処の世界に送ればいいの？」

「モンハンの世界に送って、とりあえずあいつには腕輪つけているから悪さしても電撃が流れるタイプだから」

と、黒い発言とかも言うフォック

「それじゃあ俺はお別れだな…それに短いがあるがとな…あいつらもさっきお別れ言ったから後は大丈夫だろう…それじゃあな」

ゼロはシャオルーンに乗せながら手を振ってシャオルーンと共に去っていった

「いってもうたな」

「ああ、アキラはまだ色々と付き合ってもらうよ…まだまだ手伝ってもらうこととか色々あるんだから」

アキラはなぜか不安を感じていた。

なんか嫌な予感がしそうやと

「さて、夕食食べて寝て、明日はギルドの方もやっておかないと」

「なんや？ギルドなんてあるんやな」

アキラはギルドがあることに疑問を思っていた。

「そりゃあ僕と先輩のギルドですから」

「まあそれはお楽しみしちゃる」

一体ギルドとは？

それは次回！

## 第２０話　水と炎の戦い（後書き）

負けた～

レック「リザードンのままじゃなくて人間でも」

いやあれでも溺れるから無理ある（汗）

レック「次回はギルドですね」

まあ俺達のだけど

## 第２１話　ギルド『聖なる（セイント）救世主（メシア）』（前書き）

さて、ついにギルドです。

アキラ「なんや嫌な予感がする（汗）」

そんな第２１話をどうぞ

## 第21話　ギルド『聖なる（セイント）救世主（メシア）』

フォック達は別の世界へと移動していた。

「にしてもそのギルドでは何を主にしてる？」

アキラはギルドの事で質問する。

「ギルドは困った者を助けたり、魔物を討伐したりとかするんだ…俺達は単独が多いけど時にギルドの仕事とかで別世界に言ったりもするんだ…まあアキラの世界というかあいつの世界に行ったのは依頼として…つまりフリーディセンダーである俺の仕事の依頼だ」

「へえ～そうなんや…だからフォックは俺等の世界に来たんやな」

ギルドとは団体でそれぞれ依頼をこなすのだ、アキラはそれで納得した。

「大体それぞれ誰が行くかによって決められるんです。僕はとある世界に行ったので…もちろん報告もしないといけないので」

そう、フォックに報告したのはそのためである。

「でもまって～な？つまりフォックはギルドのなんや？」

「言い忘れていたな…俺はギルド『聖なる（セイント）救世主（メシア）』の主なんだ」

と、フォックが言う

「マジ！？なんでお前が主やねん！？」

アキラは驚く

「これでもギルドの親方なんだから…さてついた」

ついたのはとある世界の建物だった、かなり大きく3階建てとなっていた。

「でかっ！？ホントにここがギルドかいな！？」

アキラはツッコミをいれる

「ギルドだよ、入るぞ」

早速フォック達はギルドへと入っていった

……

「なんや広いな～」

アキラはギルドの広さに唖然とする。

「ここがギルド『聖なる救世主』の中です。ほとんど食堂とかと繋がっていますが」

そう、このギルドは食事を取ることが可能で食事を取りながら依頼を選べるのだ…ただしここはランクがあり、それぞれ下位、上位となっている。もちろんランクもそれぞれ下位はE～Aランクの依頼、

上位はS～星9ランクまでとなっている。

「ランクによって依頼の量も増えるんだ…ただランクが高いのはかなり難しいからそう簡単な依頼じゃないんだ…もっとも俺とレックは上位だけどな」

「へえ～そうなんや」

フォックとレックは上位の者なので、上位の依頼を受けることができる

「おっ！フォックにレックじゃねぇか」

カウンターから一匹のポケモンが出てきた、硬い鎧のような体に頭に二本の角がしっかりとはえているポケモン、鉄鎧ポケモンのボスコドラだ

「おっ！ドラボラのおっさん」

「誰がおっさんだ！」

と、怒鳴るように言うドラボラというボスコドラ

「なんやこのおっさんは？」

アキラは疑問に思いフォックに聞く

「ああ、このボスコドラはドラボス…通常メタボなおっさん」

「おめぇも人（ポケ）の事いえねぇだろうが！」

よくみればドラボスの腹は出ていた、硬い腹はぶよぶよな感じに思えてくる。

「（なんやおもろい感じやけど（汗））俺はアキラっていうんやよろしくな」

「おっ！おめぇの事はリーダーであるフォックから聞いた、ここでしっかりと働いて罪を償えよ」

えっ？どういうことや？アキラは疑問に思ったらしくフォックに聞いた

「なあフォック、俺に何をさせるんや？」

「ああ、まだ聞いていなかったな…お前にはここで働いて罪を清算させるんだよ…依頼をこなしてな」

つまりフォックはアキラにギルドに入って罪の分を働いて清算しようとしていたのだ

「なんやとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？」

これにはアキラは驚く

「ちなみに逃げたら…ぶちのめすから♪」

黒い笑みをだしながらフォックは剣を構える

つまりアキラに選択の余地はないのだから…

「わ、わかった！わかったから剣をしまってくれ！！？」

アキラはついに降参し、ギルドで働くことになった

「よかった、まあバイト感覚だから大丈夫だろ」

「バイト感覚ってあのな～」

アキラはタジタジになる。

「あっ！フォックにレックじゃん！」

フォック達は後ろを向く、そこには一匹のポケモンがいた。伸ばした青い両耳に両手には突起がついていて、犬のようか顔のポケモンだった、波動ポケモンのルカリオだ

「おっ！ルリオじゃん！」

「元気にしてた？」

フォックとレックはルリオと呼ばれたルカリオの元へ挨拶する。

「もち！オイラは元気にやってるよ～♪」

と、子供っぽく笑顔に言うルリオ

「ところでそちらのゾロアークは？」

ルリオは視線をアキラに向ける

「ああ、こいつはアキラ、ここで働くバイトだよ」

「そっか、よろしく♪」

笑顔でアキラに挨拶したルリオ

「よろしくな（汗）」

アキラはタジタジしながら挨拶した。

「さて、これから仕事に入るよアキラ、覚悟しとけよ」

フォックに忠告されながらしぶしぶとアキラはフォックに従った

「それじゃあまずは仮登録からね」

仮登録とは、仲間になるポケモンは正式として正式登録がある。しかし仮登録は事情によりしばらくの間だけギルドに入ることになるのだ、もちろんアキラはしばらく働いてから出るまで働かされるが休息や休日ももちろん入るので安心

とりあえずフォック達はカウンターへ

## 第21話　ギルド『聖なる（セイント）救世主（メシア）』（後書き）

ドラボラ「俺はボスコドラのドラボラだ！よろしくな！！」

ルリオ「オイラはルカリオのルリオ、よろしく♪」

新キャラ2体登場です。というか過去編でも登場しますけど

ドラボラ「なんか俺の扱い酷くねぇか？」

あのおっさんよりどうかな～

ドラボラ「おい！」

ルリオ「最近おっさん、ダイエットしてるけどかなり食うんだよね～」

ドラボラ「おい！それ言うなテメェ！！」←ルリオを追いかける

ルリオ「アハハ♪捕まえてみてよ～♪」

何がなんだか（汗）次回はアキラに依頼をさせます。ちなみに下位や上位やランクはモンハンとポケダンから拝借しました。

## 第２２話　アキラの初依頼（前書き）

というわけで依頼です

アキラ「久しぶりやな～」

レック「先輩遅いですよ～」

ごめん、バトル部終わって他のも書こうとね

ドラボラ「まあとりあえずいっちゃおうか？」

ルリオ「では第２２話をどうぞ♪」

## 第２２話　アキラの初依頼

カウンターに来たフォック達、カウンターにはドラボラが立っていた

「さて、関西弁坊主に合う依頼はあっかな～」

ドラボラが依頼を選ぶ

「関西弁坊主って（汗）」

アキラはわけがわからずタジタジになる。正しくはコガネ弁の坊主だとは思うが…（世界観的にはコガネ弁は関西弁と同じ要素なので）

「おっ！この依頼にするか！」

ドラボラは1枚の依頼書を取り出した、そこに書かれているのは…

依頼：落し物の探索

依頼主：タブンネ

詳細：シグナ草原で大事な技マシンを落としてしまいました。技マシンの中身はきあいだまです。お願いします

依頼内容は落としてしまった技マシンを探すことだった。

「なるほどね…ここは俺とアキラで行くよ」

「いや、俺も行く」

なんとドラボラも行くようだ

「おっさんも？なんで？」

「いやな～どうせこの関西弁坊主の面倒みるんだろう？心配だから俺も行く」

「わかった」

というわけでフォック達はシグナ草原へ、レックとルリオはここで留守することに

……

シグナ草原

ここは草タイプや虫タイプのポケモンが多かった

「鋼牙合砕（こうががっさい）！！」

ドラボラは斧を振りかざし、地面を砕く…すると敵ポケモン達は吹っ飛んでいった

「なんかおっさんすごやないか（汗）」

ドラボラの強さに驚くアキラ

「ホラホラボサッとするな、ここには魔物もいるからな」

「魔物？」

するとそこから頭が双葉の緑色のモンスターが現れた

「これが魔物かいな？」

「そう、こいつはプチプリって言う魔物だ…まあ俺達はそれなりに強いから圧倒的だけどね…ほい」

フォックが剣で一閃するとプチプリと呼ばれる魔物は双葉を斬られて消滅した

「消滅しよったで！？」

アキラは素っ頓狂な声をあげた

「魔物自体は消滅する…ポケモンとは違ってね…ただ中にはポケモンと同化してしまう魔物までもいる…キメラ化みたいにな」

冷静にフォックは説明した

「そんなのがあるんやな…」

キメラ自体になっているアキラも真剣になる

「さて、俺のやるか～」

アキラは構える

「ナイトバースト！」

ゾロアーク特有の技、ナイトバーストが魔物に襲い掛かる…魔物は吹っ飛んで消滅した

「中々やるじゃねぇか…オラァ！」

ドラボラも鋼鉄の逞しい両腕に持っている斧で魔物とポケモンを一掃させる

……

シグナ草原奥地

「ようやっとついたな～」

「え～と…あった！」

フォックは技マシンを見つけた

「どうだ？」

ドラボラがフォックに確認の声をかける

「間違いない、本物だよ」

「ほんじゃあ依頼達成やな」

フォックは頷き、バッジを取り出した。バッジは丸い形に真ん中に☆9と書かれていた。さらに左右には白い翼をかたどったものがついている

「そのバッジはなんや？」

アキラが聞いてきた

「これはギルドの証であるギルドバッジ、これで戻ることもできるんだ…こうやって掲げると…」

フォックがギルドバッジを掲げた…すると突然フォックは消えた

「消えた！？」

アキラは驚いてしまう

「ハハハ！とりあえず関西弁坊主も俺に離れるな！一人で帰ることになるぞ～♪」

「待って～な！！」

アキラは急いでドラボラのそばに来た、ドラボラはギルドバッジを掲げた…二人の姿は消えていった

……

「今回の報酬だ」

早速戻って依頼人から報酬を受け取り、そこからドラボラが報酬を

分けた…この世界の単位はポケもしくはガルド…フォック達は少ないが５００ポケを受け取った、今回の依頼報酬は２０００ポケだがギルドの運営費で削られ、そこから人数によって分けて報酬をもらった、ちなみにダンジョンではポケやガルドを拾うこともできるためそれでまかなうこともできるのだ

「なんや簡単やな」

アキラは今回の依頼の感想を口走る

「でもランクが上がるごとに難しくなる…まあお前は更生のために来たから正式に仲間になったわけじゃないからな…とりあえずしばらくは依頼をこなしてもらう…いいな？」

「わかった…小さい依頼もこなせってわけやな？」

フォックは頷き「そうだ」と言った

「小さい依頼でも依頼は依頼だ…明日からもそうするから、今日は休め…2階に弟子部屋があるから」

フォックはアキラをつれて2階へ

……

ギルド『聖なる救世主』2階

小さい部屋だがベットは一つだ

「ここがしばらくお前が寝る部屋だ」

「ありがと～な、それじゃあ俺は寝るで」

アキラはベットにバタンと倒れる

「そんじゃあお休み」

フォックは部屋のドアを閉めた

「（さて、明日はあの子が来るみたいだし下でおっさんと相談っすっか）」

フォックは下へと降りていった

## 第２２話　アキラの初依頼（後書き）

ドラボラ「簡単な依頼でも、ギルドはそれでも依頼をこなす…たとえ報酬はすくながれと」

何どたんばで一人で語ってるんだよ（汗）

ドラボラ「俺様の武勇伝を」

はいはい、また今度ね～

ドラボラ「酷い（泣）」

アキラ「泣くなや（汗）」

次回は俺の弟子登場！

アキラ「弟子って誰なんや！？」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0749o/

炎龍の旅～ポケモンディセンダーズ～

2011年10月24日01時59分発行